# 俳林玉枝集

夏

# 俳林良枝集

## 夏之部

雙雀庵氷壺編集

夏

漢津 太陽ハ南方南ハ任なり陽氣物を任養せ時に夏とせ二夜ハ候なり候大にして則宣平なり 三 夜一大なり氣物を養ひ長大なるを志むるなり 釈名 夏ハ何つなり何となると通せ夜ハ何つ一

・実一帝・祝融・朱明・昊天・蒸炒・立夏・仲呂

四月

・和月・和の芒月・得意月・花然月・正陽月・首夜

・孟夜・余月和月といふも和のむ月といふべきを異せるなり

おそひ出せ末黄や四月のさくら物　菊

野市 若干山の根をする四月この水　古 岳 雅

えもくと 時に 四月 うれ　古 湯 之

先づに橘薫る四月この宿　古梅室

川の瀬の廣くなりける四月かな　在尓

山鳩の声も木ふかき四月哉　菅之

川添をたどりて過る四月かれ　峰風

淵に瀬に魚の子をよる四月かな　由條

木の影もまさ風も白き四月かな　諒之

竹の葉も枝も光る四月かれ　テハ 水竹

暑き夜は何かと夢のつゝき四月かな　甘菜

高山の谷より下り緑き四月哉　祖緑



# 卯月

侘しさに出るや四月の旅支度　影左

卯月望も終むつ雨となるかな　古寥松

橘より卯月になりぬ花しと　林祐之

木の下陰る宮明て高く卯月かな　森文二

一枝て鉢植の花る卯月かな　水壺

添葛根や卯月の葉の宮明し　上毛 鶴雄

卅に昭をいよ夏月のちしめ哉　無雨山

# 更衣

公 注 一日より八衣の人ゝ奈の中宮の内の注羽束揚新寮ひらぐ 注殿のうらにて表生絹胡粉もて結をこの強代にき掛 是注事 年に新ら袷衣の夏衣は袷ハ注言衣注去りしのちや注もとく 注袷衫 内蔵寮より奉る女房のきぬのしも衣の人の単衣こうちめ奉りし也ぬり 堂八上

藺蓆裳小上藺蓆
色常のさしし

ひとつ祝てうしし語は頁ぬきつゝ　菊
更衣見ぬ夜壺の噂この邦　由磐
起しや衣のへしさ人の来る　波鷄
むく起は出あかりしてお給ひ　春久雄
おきじとつるハおきまとおきつゝ　範来
さきじ人の来てきまとを更衣　不染

白重

硯する侍にうけくし白重　古嵐雪
氏よりもそこちあり亀糸このさしは　古頃布



まゝ裏の室をもみて白このさしは　糖月子
竹逢の袴やおのゝ糸このさ袴　壺長
末や竹のそこの袴うけりぬ白重　仙月
ふたり居て婦たり目立や糸このさしは　月昇
出見んこのら着てそこり今里糸重　甘菜

卯の花衣

裏白裏青柳に
おなし

袷

袷着て一日遊ぶ畫根この邦　酉山
着ゆりまゝらし袷のおさのり　畫水汀
初ゆきや薩の風に志ぬりの利　陳良

雄井のら結まなりてをとり竜 ムサシ 萬里
山のせの袖をぬきつゝ裕 丶 原然
綿貫やふしぬ元さの朝くをり 下サ 卜外
ことぬきの帯ハ法てこん能なり 藥 水壺
引のまゝ岩なのら竹ノや夜羽織 青圃
青簾 藻 青葉の笋とハ醤翼の笋とて四月一日形ゝ爰笋をこのけるを
一説賀茂の葵を翼笋まこのやまる故青葉の笋と云
雲をし火の遠て雨のしやまされ 葉雅子
炷をのゝ風にをるゝや青さゝ花曉子
はしくなくけふりをしまや青簾 瑤花子



風の朝ニ来ませてまはしやまさ簾 ムサシ 文星
内ハたゞ雨のしうこゝえて青さゝ 丶 緑友
青簾鶯ぬ雲をしのう法りを利 丶 旧左
まゝ帯る竹をけふの名鍬や青さゝれ 丶 不二丸
青さゝれ松のこゝりも稱りを里 古棠
此色をこのへまおきし青さゝれ 玉頑
よ和人の居て志つのあり青簾 宋丹
うまもしき彭のをまるや青簾 方寿
明通まは風のまれふや青さゝれ シナノ 母月

行うあるやうさて申のし　青　籠　下サ　魯水
常藝本の風も通ふ　青　さかせ　上サ　素絲
稱る新さしの事申のし　青　籠　一作
内家は通ふ風行り　青　さくれ　智幽

主水司供氷　延　一日夜の始の日本書ハ先今日献そ給ふ事ハ六月朔日
に貢そ也

孟夏の旬　公　一日扇をおくふ・扇の拜ハ夜の季の所にてあり始に臣
下に御酒をたひ改を知ひし召義あり二献の後扇をこうち
玉ふ扇のおとて
無所るゆゑあり

筑摩祭　一日或ハ初午の日と云て近江の国筑摩の庄筑摩社此神ハ稲
食を掌るまゝあり百里女婚せ則季祀に鍋釜を裁て
神に奉る事ハ不幸廿壯の間に嫁とあれハ止事を得せ改嫁
せ再嫁の者二枚を用三嫁の者ハ三枚を用て神幸の後候せるを



云て　秘　つくまハ近江國淑名の條に所に妻と云愛所り
其事にあらはしたくまと云村あり其所の神社あり

鍋釜しの差て身ハ重き乗りけれ　下サ　一亭
のかへるも乗りの無やあ鍋の蝦　ムヲシ　係友
かきし祝ハなしめ　ヤしあり　鍋乗り　下モ　弘、測
乗ひしふ身ものつくまの乗り　森　樹石

多賀祭　中午日日の第宮ハ近江国大上郡多賀大明神
古事なりと云て

住吉祭　上卯日摂津住吉
神社なり

稲荷祭　卯日神輿五社巡旅愛西に出東寺南門の内に入る此ハ
所にのしめ家をこのまへ五社神輿各南に向て其上安置
供給事幣
あり云て

龍頭太 [聖] いまり 拂社田中の社猿田彦神ありしなりしかり
とき 四藝の先へのくる面を龍頭太といふなり
先ハ先ハ龍頭太 [illegible] 龍頭太 糖月子
神の裁ハふるきまかしぬ龍頭太 春長
宮海の芳まつかし 龍頭太 巣欣

梅の宮祭 [年] 上酉日 梅氏の祖神也 山城国葛野郡にあり 四里ある所なり 婦人産月に至当社の所をいまゝきて常襟に佛ハ安産する
といへり
山崎ハ今に繁りて 梅の宮 分貴

大神(オホカミ)の祭 卯日三輪のまつりあり ・當麻祭 上申日 大和之 山科祭 上巳日

平野祭 上申日 ・松尾祭 上申日 酉日 今ハ ・杜本祭 上申日 河内之



水屋の能 四日五日南都水屋門のあり [illegible] 玉の社 ・當宗(ヂムネ)祭 上酉日 河内之 今日朝使あり 杜本當宗近辺故一人の紙両社之

廣瀬・龍田祭 此両社大和にて廣瀬ハ大忌神 龍田ハ風雨 [illegible]の難を除き豊年の祈禁中にあり 繁しる

山崎 日の使 三日或ハ三月にて ・八瀬祭 辰の日 馬に乗

擬階の奏 七日 [illegible]ハ二月列見の時の成選の雑丹を式兵二省より
[illegible]を大臣奏するなり
[illegible] 擬階 [illegible] 奏 とき 早ヶ 桑居
[illegible] 擬階の奏 [illegible] 下毛 巣欣

灌佛 八日 ・龍花會 ・五香水 ・浴佛 [illegible]
[illegible]
[illegible] 歳
灌佛や霧の中なる一章集 [illegible]

佛の産湯

うん仏やのまりくに歌うちけ　波路
まや人の湯を佛の産湯かれ　青柿
拓殖あく皆なき仏の産湯哉　下ヶ　卜外

佛生會

生るゝを光りを放つ佛かな　たよ女
人の出るさのりのかるや仏生会　世負
堂ゆゑまる重ね是を佛生會　角弥女

花御堂

黄昏に花を忘れん花御堂　御風
笠と山の花とり交てむ御堂　漁藻

夏六

人の世を根のなき喰やむ御堂　恵明
来り人の夢然かりしや花御堂　世負
花御堂あるゝ遠よりこの秋来り　波路
なき日をしきかりや花御堂　秋之
花御堂なのめて後にあるゝ利　升重
魚に鉢をくれて更のら花御堂　双岳
花御堂寄ハたるの秋吉の中　出ハ　其仙
正面へ朝日のさしやむ御堂　ふ中　桜巣
菁なりの来なり花御堂　[illegible]

戒壇堂の開帳 八日山門より・山崎祭 同日天王祭 童装しかふ・堅田祭 宮日

伊勢神衣祭 [図] 十四日麻績連しらふ氏人麻をうりて貢和衣を織

日吉祭 中申日山王祭なり大宮聖真子二宮八王子客人十禅師三の宮

以上七社の神輿舟に乗り出御事なり

加茂祭 [増] 中の酉・御形・御祖下賀茂の別雷両神の祭なり上賀茂御祖下賀

人々葵桂のかざりかづらをかけるあるは世俗に御ふり事なり

只葵のみ用ふるは此祭のみなり

御形 途中にて加茂へ出でやうの御形の日 菓 欣

あまたの人のかしら絵也 御形の日 優 く

葵祭 斎王葵まつ 男のかざす葵 葉 葉子

葵をも神風のたふとみ 祭り この事 淇 一

夏 七

中山祭 [公] 同日出雲法泉院より [illegible]

吉田祭 吉田の森日の宮なり中納言

山蔭の建立しなへり

関白の加茂詣 [増] 法神多の祭日なり天福二年摂政関白道法公より始る

神人葵芳を持社頭に近寄る時は道を背きて対面の事なし神

おもて・かつらまゐり・衣冠・さてさる舞なり御ぶり云云 [饗] 主人五条

東をて地下殿上人お祝あり御祭帝椹木をかけ給ひ也 葉特管

笠原宮といふ物を

召仕せらる

三技祭 [公] 出雲卒川祭をいふなり [令] 夏の祭礼なり

千團子 十六日三井寺鬼子母神を童のかざりなり

清らこの祭うへは清めて子葉子 株 堂

[illegible] 鬼子葉子 定 雄

むしらへてうちけん弓も子等哉　尚白

ならへてもかなはぬものよ弓あらし　杜之

大矢数

[年] 洛東三十三間堂の矢数毎年四五月ノ間吉日の吉養の節
晴天を見ひ定めて行なり

大矢数通りし跡のちのあらそひ　如白

本より中ぬきをかへてや大矢数　仙月

息つきに旅つきこえて大矢数　杉の女

矢の代のおもひつきし大矢数　白井不老

嵯峨祭 中亥 雲居のまつりや ・向日明神祭 中辰 ・久世祭 中巳

清水地主祭 九日 ・當麻法事 十四日中将姫の忌日より結ひ供養をなすとぞ



江州八幡祭 中卯 ・手安天神祭 年日近江 永原

土塔會 よゐり 二十日天王寺 ・菅ノ官祭 中午 近江 ・花供 廿一日高野大師の法衣を替ることなり

神祭 ・忌さもと ・榊取ル 神家君さもて榊とる時に和歌を詠むの説加茂の神事にありとあり

日光祭 社家説に御祭礼ハ寛永十三年四月十七日始て行せらるると云く

日光の祭や樹々の木する中　杢呂風

まつる日や袴に四ツよる未の吉拵ヘ　三草

矢々代の矢々祭りや日の光り　下井 寒翁

ちこのうへ御代のまつりや日の光り　京 旅

松前渡

[夏] 毎年八月蝦夷へ渡り津軽より商人産物交易の為に松前へ
行くを云ふ海の難の風を待つ波濤あらきをつとむ

[illegible]四月始て出岸し九月を限りに帰国す
[illegible]上るを秋とす云云

松なのことりやさても能き日和　葉雅
まつなべ追風の明て秋たゝやし　俊庫
神風や松なべ乗る帆のたゝこ　氷壺

梅天 暮夜の天象をいふなり

・小満節 四月の中なり

・和清の天 文源 ことなり 和しき

短夜 清しき なり

短夜や芳に俗ひこ水白し　乙也
短夜の月ものさしや世ゝの宮　山子
こしも夜と口ゝいふや宮をとり　田禾



短夜や打蛇む事し井の色　溪寓
こしにくて仕合なく夜や雨のこをり　京　然池
明安き夜の末にそふや湖の照り　芳艸
夜寒の低り空こんて明やさし　下サ　氷湖
[illegible]安き夜に耳立や艸の風　故屋

麥の秋風 ・麦秋小満節の末なり

麦秋や棕のこしのき海し舟　古　秀外
麦秋やこのゝる廣間に猫ひとり　ムサシ　[illegible]
畑なりに刈ことまゝなる小麦ゝ葉　[illegible]次

麦荊

## 牡丹

・ふかみ草・廿日草・名取草・蜀黄草・花王・[illegible]草・[illegible]草

湖 許六曰牡丹を連俳とも夜の季に用ひ来る事[illegible]大に葉[illegible]しくこ[illegible]より出しとりと云りいうなるものにや去年蓋因[illegible]葉物少きなれ其を夜に由つりしとりといふ一説あり

一輪の[illegible]ん 終日ちりにも里 古 蕉雨

施しにせるやうなる牡丹の形 祐之

[illegible]の戸も明てある事[illegible]ようなる 工手コ 古堂

辻風のさし来てひしく牡丹花 李交

提て来て彰をうたふ牡丹哉 隆風

咲この事て葉をおしの事る牡丹花 上毛 一雪

## 芍藥

芍藥や咲まれさうな咲こ家 古 碩布

芍藥や咲しと葉のもたをしる 祖紹

[illegible]とにはんる蕨このをるなりしたり舟 松宇

咲こちて針さへこせぬ蕨この形 巣欣

## 燕子花

・このなよ[illegible]・[illegible]

・花の名

[illegible]咲[illegible]ふ[illegible]かきつはた 龍得

囲む葉も出ぬ事て咲や杜若 仙角

[illegible]むあに一日くやこの[illegible]つはた 田慧

一夜に[illegible]足る花や燕子花 [illegible]以

[illegible]し葉のこうち懐やこの[illegible]つはた [illegible]

雨水のまはりにそまれば蒸子花　仝光
杜若雨にこのまはりぬ花くさ利　下毛　文蓋
布さらさ水筋清し　杜若　下サ　十條
水まつ清る色粉ふりし蒸子花　ムサシ　熊山
水ふりしの遅き涼きやこの頃つたる　テハ　雪山

## 葵草

・二葉艸　・葵ごろ　・からこのふひ　催　うらあひ　・立葵このふひ
獨ごのもの眼先にこるまき葵ごのれ　忙よ女
見ぬ愛のあるも葵の花さの里　酒香
伸ばしぬうちこのらひらく葵蒸　巣欣



## 白及（ラン）

和三　紫葉草を立て葉を生ず秋葉に似て開く花く色
淡き　ちつり三四月草端に白き花をひらく芳しかれ
又名ゆ二種あり根ハきさやぶのめく
白色塊りあり　称すり矣
まのすしき葉もまゝこゆる白及ぶ　葉雅

## 蕙（ケイ）

年　和俗蕙と稱するその白及の類にて葉大少あり山中に生
るその白花黄色又色ようにて雲ずるその黄蕙星蕙あり
此根蕙のまとく
こゞとあり
鉢の蕙花とるまでにふやしけ利　拙誠

## 風車花

花　纏枝牡丹（カサクルマ）葉艸あり草葉鉄線の類あり花八弁にして
単紫蒼碧色重形ち風車に似たり又白き花あり
風車蛇刺ゐるまをしきあり　巣欣
紫ハうまくも中のし　風くるま　優こ

羊蹄花（ギシヽハナ）・羊蹄根（シヽ ノ ネ）

時珍曰羊蹄は葉の長さ尺案半の舌然のことなり
かゝり夏に入蕋を起し花をひらき案を結ぶ
夏至の日枯る羊蹄根を以て名とせるなり根長蕋藤に似て蕋赤し
禿瘡を治せるをもつて禿菜と名はくるなり 義 その味淡し 萬 ハ
シとよめり畧語なり俗に志のゝ又ぎしぎしと云ふ夏に至て小黄花を開く
其根大黄に似たり○羊蹄和俗に大黄といふ其葉なり蕋花ともに黄
赤二種あり其実枝ともの振り
うまこのせんきしぐしと云とを

羊蹄や葉花とは花のみとまらば　甘藻
よしあしの紫向にこそのる志の裾かれ　藻雅

石蘚花

・いはを志の裾石上に叢生して蕋紫と成書花のとく時は黄
花白花をひらく茅ゝの上に根鬚を生る人まれ有りて
砂石をそつてこれを栽
ちを[illegible]て雲を

石蘚や日にも花のきゝ花　佳茂



苣の薹

年 田圃家圃多く出生を栽る三四月薹を起し薹絶へ用ゆ
[illegible]ゝ脆し初めて白汁あり葉毎薹を捲へ重りて又
たゝ[illegible]五月黄花を開く初めて綻る此葉のまとし
一花実をむすぶ鵝虱子のまとし

なまなこのにかきて殘されて苣の花　古 堞夏

夏枯草（ウツホクサ）

時珍曰原生志多し苗の高さ一二尺斗り其薹ちと方葉苣
に類して生ず細歯あり背白く薹綻に種を作ず其さ一二寸種
の中に淡紫の小花を開く三四月花をひらき
実をむすぶ又種を作ず五月分枯る

そ生し夏に色ハのくれてうけ石艸　樹石

蓮の浮葉

月の中にうけりし蓮の浮葉の葉　如白
なのむ生ハ小さきに蓮のうき紫かれ　由儀

綿蒔

綿蒔や明候も明になりし頃　祐之

茶先草　[illegible]　十條
[illegible]　巣欣

玉巻葛　玉[illegible]　松頂
[illegible]　巣欣

玉巻芭蕉　[illegible]　[illegible]
四五日のうちに[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　種好

紫羅傘　一八や[illegible]　[illegible]
いちはつや二[illegible]　[illegible]　[illegible]丸



紫羅傘や住に桑安き耕地屋　松頂
一八や雲のきり[illegible]屋根のうへ　[illegible]　市笠
いちはつや[illegible]　東雲
一八や早[illegible]　花調
一八や[illegible]　水山
めさまし[illegible]　出ハ　雪
一八の[illegible]　[illegible]　精中
掃く先に居[illegible]　唯[illegible]
[illegible]　仙月

著莪

瞿粟の花

活て生ハかやまくちらはあしの花　古　秀外

うとまゝのこと八ゝ也ゝこれ芥子の花　甘藻

蒸る事しやそ生とゝ見ゆ　一ツ　ヨウラ　梅新

宝鐸花（ホウシヤク）

【箋】俗称の桃灯と云物是ありこれ茎の高さ一尺斗葉ハ生車ゝ如きちゝ白きこれ候て内ゝ高き彩あり蕊ゝ三筋

宝鐸ゝ如きり江東原生ゝ多し

寅鐸や花ゝ中ゝの世しゝ名とも見る　桐左

霧なれの事ありハこゝ見ゆ宝鐸花　佳苔

鴨足藤（キシキサウ）

和名雲の志ゝ云石上ゝ生る

小草ゝ也

照志ゝ如土の志ゝりや庫耳草　涯く



蒡先の名ゝ也ゝ鴨足艸　戸カ　影和

山の井社岩生次第や知んき草　巣欣

石藤（イハフチ）

又草茂とも云紫白の二種ゝ

石茂や瀧の志ゝ也ゝ葉のぬゝ　雙岳

岩藤やひと足ゝ志ゝ也ゝ　下サ　専志

石茂や瀧を築里ゝ出る花ゝ　卜外

躍花

【年】通草と云ゝ夢麻ゝ如て二葉ゝ生ゝ三四有紅白のむひらく

蓋母艸ゝ如ゝり【風】高さ尺ゝ也ゝ小葉ゝ如て雲形人の笠を

名てゝ也ゝ

ゝ如ゝり

黄ゝる温泉壺　暇てゝ也ゝり艸　旧左

[illegible]のぬるも[illegible]雲[illegible]ありやをとり[illegible]蚪　巣欣

休[illegible]なく[illegible]の[illegible]たしをとり花　下サ　庭花

## 茶挽草

[篆]烏麦也一名蕎麦田地に自生す苗紫小麦に似てこのもとく小なり種細し小児種粒を爪の上にのせ[illegible]旋出するゆゑ茶臼を挽くゆゑ依て此名あり

[illegible]ある[illegible]をおもしろつゐるや茶挽蚪　龍稱

[illegible]の[illegible]つや西日の茶挽草　優々

## 柏散

貞徳説度なり又一説秋なりの依拠存[增]

黄のこえて[illegible]庭の柏の[illegible]　下サ　曽現

[illegible]ハ[illegible]柏ちる　ムサシ　文種



柏ちる日[illegible]も温泉場の厚着かれ　花海

[illegible]中[illegible]柏の[illegible]　楓什

## 卯の花

●[illegible]●卯木
●[illegible]根卯の木

[illegible]卯の[illegible]白さう[illegible]　由[illegible]

卯の花や[illegible]白[illegible]の[illegible]　葱玉

[illegible]卯の[illegible]黒く[illegible]　[illegible]

卯の花や[illegible]の明星　[illegible]芸

[illegible]卯の川　[illegible]芳

卯の花や[illegible]遠[illegible]木　下毛　文[illegible]

卯の花に鼻突きむや繋きて馬　エト　玉清

國見峠にて雨ふる日

大せきのしゆのむくさき雨の山　葱玉

育つ男もあくて未定し桐の花　古　尚白

性還へうし海向あり却りの花　上毛　梨堂

近き世ハ葉にかくせたり梧の花　ムサシ　柳圃

里の名ハ花えあさよきりの花　謙之

若楓　若楓むるに男の詠るをの紀代　古　蒼札

若くてハ涌く井の水や若楓　完路



来るへの詠る雲のまへや若楓　素有

こくら葉に秋をとせたりこの楓　上毛　如水

飛込て春の桐の世やこのかくて　井磨

茂るをこえて志るや未深く殘る花　ムツ　静夫

旅もよきさ海あり山に余さも見る　下サ　玉頂

雨近し無波の夏とこの葉の夏　由蟄

昭の上ハ雲吹たらふ若葉の礼　夏以

昇る日の白しにくそるこの葉代　風什

朝のをの徒に冷しき若たこの礼　上サ　惟蟄

残花

餘花

若葉

郭ゝや若葉見てゝ身を昭のさゝゆる　仝
陰ふりをこしたまゝ庭木の若紫ふり　下廿　十條
むらゝ若葉見てゝよる蟲の机の那　上元　雄逸
やゝるゝて出て見る雨のこゝの木蔭　、　昌洲
日をうゝゆて澄花持ぬ梓若紫　ムサシ　葉曉
湖のこゝしまゝ見ゆるこゝの紫この那　、　蓑正
若葉のも見ゆ雲りの河る楓の李　、　梅紹
ぬれて此風の重こゝやむら若紫　、　柳佳
蓑る日にそえる楓のこゝの木蔭　、　雪蕭



# 若葉の花

うら表見ゆる若葉のそよのきゝ　、　さく女
花なくも嬉し接種のたつ若紫　下元　思成
明るゝ雲より清きこゝのたこの礼　清良
境内の蓑くなりし若葉この那　御風
横をれて日溜ぬゝゆるこゝの紫　溪宗
新法にて空し若紫の花一叶　仙月
木の見出せ若葉の花や係たる　ムサシ　如水
水のうく新やこゝのたの花さの里　、　山祐
出て花もこゝゆる若紫の戦きうれ　赤夕　如春

若葉の紅葉

古い葉も無くなりや若葉の花ばかり　トサ　魯水
なびかしこのこゝろや若葉の遠ことの紫　テハ　閑富
日の葉もそふてことの紫のそこちかな　トサ　太郎熊
戦くまもこのまき若葉の紅葉かれ　仙月
君のまゝなとのらことのそのそこちかな　巣欣

病葉（ワクラハ）

とくらはしき紫と云暑なり若葉の時若葉しくるそのなまく
なりあ垂病葉なり
とくらまゝやこのまゝかよ更とのそく若　祐之
和くら葉の若葉もこゆる古井かな　渭水
病葉やそらくハ何せと落もせぬ　仙月

草木の茂り

とくらまゝを鋏てまゝる日暮の水　採堂
とくら葉やそこちよかるゝ色てはし　緑友
こうら若き枝よとくらまゝ同立ゆり　壺長
蜻とこし病紫えし　塀のこうち　エチコ　千布
庭さんやとくら紫こゆる何らしあと　由儀
わくら紫や一まゝち長く蛇の京　素絵
神いまゝ里ともいんえて茂りかな　史仁
翔り垂る水の青まる赤ゆりかれ　由儀
鳴青のしてゝ風の来ぬ茂りらな　サシ　海鷗

取りもやすさしもやすらも桑の切殘り　芳州
彼のふる草もむらむらく殘り汁里　スカ川　一宣

## 夏木立　結葉

此先に里の所り然あり夏木立　霧都
夏木立人追て日ハ暮に帯り　雨奥
瀧のうらはんにけり是や夏木立　巣欣
さまくに人かく然さむ新樹かれ　溪翁
瀧さまし見て雲のたる新樹代　桂葉

## 新樹

## 葉櫻

葉さくらや世にうれ人の出来行日　古　道彦



葉さくら雖も花とはんておくまのめ代　範成
葉さくらや一木くらにくらき　山　松溪

## 木下闇

下闇や鶯の所里く小竹原　古　道彦
春の花を譲るや木下ゆみ　無　羽雪
下やうや地虫なのうの蝶の聲　古　家雪

## 常盤木の落葉

常盤木の大きな紙なる落葉かれ　古　乙二
ちるとはんる近に青ふき松葉蕉　下サ　卜外

## 葉柳

葉柳や連まつ橋にひとそうき　一止
葉柳や塀さまくにたまる枝　ムサシ　水菊

この里橋のひ[illegible]て葉にある事なれ　唯[illegible]

美人草　[冒]説ニ何り事しの花のちひさき花をも云り是夜なり又眉
絵りの花をも云り是夜なり是作者に問て季をさしてむ
是し紹師説ハ
夏なり

咲よりも萎に手の何り美人草　渭水

繡毬花（テマリノ）　[風]花を作る事繋し隠ニ花咲集りて
手まりに似たり

たまに越き時に捻りて手まり花　巣欣

みとり子の枝も花をこそ手まり花　優々

ひと枝にしてひるとる花柚の花　古蓼古

柚の花

柚の花やたしまゝ[illegible]ハ落雪[illegible]　古呼平

[illegible]日もなく萎[illegible]の花柚の花　西馬

千[illegible]柚の花[illegible]小路[illegible]　誠之

降る日[illegible]松穀の花[illegible]　賢外

出[illegible]も[illegible]しゝ　巣樂

恒[illegible]松穀も咲に[illegible]　巣欣

鷹爪（レタマ）　花黄[illegible]山[illegible]に[illegible]
紫ハ柳の[illegible]小く木ハ[illegible]
[illegible]咲り根花に[illegible]江戸
花[illegible]

古庭の鷹爪や何のちのち　花海

[illegible]　来[illegible]

[illegible]

花曉子

鐵線花　二月苗宿根より生きつゝ蔓にて[illegible]車の數なり葉悉多に
似て花ハ七弁なり花ニ多しかるに紫色にて[illegible]
[illegible]
葉ハ丸く黄なり

むらさき紀の[illegible]色や鉄線花　[illegible]

鉄線の花にひらく[illegible]の[illegible]　下毛　其翼

白丁花　庭地より急楮を一ゆりに苅拾へて籬とし或ハ雨落に
[illegible]を積る四月小白花をひらく又同類にてむらさきその
[illegible]女木男木の
[illegible]

苅[illegible]や根ハいくそとの白丁花　[illegible]

麥門冬（セウカヒケ）　延　やまさけ　本圖　だくさんとも大葉のそれをやぶらんといふ
葉ハ[illegible]七ハ分長さ一尺束斗表深緑色にして裏ハ淡緑の葉
の葉に似たり花種をなして[illegible]淡紫色又白花もあり後実を生
[illegible]黄色にして[illegible]根にて[illegible]なり
行[illegible]掃除や藪に麥門冬　ニウ　清民

山苣の花　[illegible]和名加波知佐の木　多　又同じ[illegible]葉葉類の苣に似れ
ハ名つくと云り　篗　[illegible]
掃に似て[illegible]四五月焦生[illegible]紅色の
花をひらく

山苣やちらかしに咲かてうけしき　優々

厚朴花　和　[illegible]ハと称す葉ハかしたに似て大なり花ハ牡丹に似て
大きく薄紫色なり大木なり

[illegible]の[illegible]葉てらさしや厚朴の花　エチコ　常晴

要の花　和三　肩骨木高さ二三尺つゝきの葉に似て[illegible]
[illegible]紫なり四月小白花をひらき出まうき実をむすぶ八

九月につく
熟す

鼓椿

絲塀の内や雲の花ひしく末　ユサシ　高雲

花にもちまり和女貞和名太豆の末比女貞法末
梗祢須三毛知の末花梓末なり

塀も籬のつくしは志ゝ藪　椿　下サ　三郎

しくみれは末ふりも古し藪つきき　ムサシ　花月

藪つきき葉荒ましいて君つき竜　由儀

折るれるの花まにつしまし藪つきき　巣欣

椶櫚の花

こゝえまのら奥にる庭や椶櫚の花　常晴



柳の花

櫻の實

蓬まいて椶ふる堂や椶櫚の花　テハ　久榮

毎日の雨ふさいらまた椶櫚の花　由儀

まつの花深へとまぬ箒うれし　甘藻

立このまゝ板ゐまた新や柳の花　素山

まゝ葉のらこそ出て美し櫻の實　花曉子

色付てふるゝまりまくらの實　不二丸

まきまゝをおきしの種や櫻の實　庭花

花も葉もおめて後まりさくらのこ　渭水

櫻の實えうまきるまに落ちりぬ　溪南

花橘

花のふにふ菅のまゝを橘の実　潮月

詮もなく拾ひ満るやさくらの実　ドサ　壽山

種つきの揺てくまるや橘能こ　由儀

橘や実家机のおきを出語　古　枝風

竹の子

竹の子やともに伸ゑ何の芳　魯石

筆の土産や土もこのまゝぬうち　而店

篤（スヽ）の子

篠の竹の子あり

其の子能ひくらをつゝ住居ぞ　ヒタチ　古　雲巣

篤の子や　新て庇ましくなと　巣欣



釣葱

葱のふに秋あり

今籠にこゝる葱ふきや佳り　葱　常晴

夕月の雲ふかきや釣葱のふ　ヒタチ　越山

岩梨

筑内江東にていはなしと云山井岩のたきまゝに生ず苗の高さ二三寸地にしきて生ず三四月梨の咲るを花さくふ楊梅の

ましし其味甘酸し

小児好て喰ふ

岩梨や近江は多き山の数　優こ

薔薇（サウヒ）

風　花は春尾下し同しまて小あり葉は石葉に似たり

そのく葉にせの生て咲しさうひれ　水壺

路

竹むらや夫こゝ茶ハ蕨ちかり　山子

蓼

蓼畑は家の影のさしにけり　花清

こまかの葉やちる秋萩に花て鳴　不二丸

水鶏へ来るや蓼の穂垂り　由條

利根子

人も来ぬからみ捨し蓼の味　亀女

蓴菜

蓴菜や舟をとゞめて水の味　去正秀

引よせし江の根もとめぬ蓴かな　去尚白

蘭の花

蘭の花影の上より角櫓　予章

ならぬ葉もありて花咲き羅つ　種好

郭公

鶯花に遊ぶ頃も過て夏なり・山時鳥・四手の田長・くぎらう・子規・不如帰・勧農鳥

ひとしきり鳴て郭公や行きけり　漁篠

ほつゝりと聲は鐘にまぎれけり　古棠

鳴きけり此朝や綾に花に郭公　十條

杜宇麦ハいまきて穂を出さず　眞仙

ほとゝぎす思ひの長し郭公　ムサシ 蒙堂

樹によつて声をきゝふくるや杜鵑　花衣

漁火の根よりつりて鳴きけり　三丸

ほりかへて夢や夜中の杜宇　敬之

杜鵑待て雀の夜明この水し　範成
鐘をきの夢の人にして聞きき　上毛　慈堂
鐘樓にハ何をかてきや不如歸ヽ　爲得
深山路をいつたまはしき杜宇ヽ　三津女
菜花に面の寄して聞きき　十二ハ　藁藻

## 閑子鳥

此ほとゝ鳥と云山林に棲て人家に近つこの鳥絡に子親の物
なりと云者遠ふとは雲夢のまひ出しかたを寄し
人ひとり見つ市て鳴や菜子鳥　古　鳳朗
菜古鳥鳴や水出む岩のくれ　古　九蕪
見おろしに里は山家や菜子鳥　漁藻



## 鷭

雨の日はおまし何とりや閑子鳥　不染
伏せ鐘の鐘し古山やこのん出鳥　△廿七　柳株
又とは知る處てもなし菜古鳥ヽ　藁堂
鳩笑ひ吠鳥ハそせて菜子とり　弘湖
汲れハなき岩ゐ鳥や菜古鳥　成伍
あの夢てこりハせまハ鳥閑古鳥　下サ　有隣
鷭なくや樹なのちのき田の出流し　ヽ　玉清
古刹根のこのこちハ何りて鷭の夢ヽ　一亭
宿とるに鳥のせく菜や鷭の色　渭水

鸚の来る芭の所のうきゝ夜風かれ　花海
雲行にさらつ芦や鸚の夢　鷺城
夜門は草にあくせて鸚の夫忍　田像
鸚なくや捨苗うゑし沼の無り　庭花
鸚なくや小橋の多き葛西館　巣欣

## 葭原雀

・きのうくし・よし却り

嶋ゆえハ見ちのゝ雪やけこ子　古　徳年
ひとつ居て何愛へもけしけこ子　、一具
湖の先社いつかまこてきのうくし　義正

砂川にちのきゝ草程やけこ子　龜友
二ちちにおなる川やきのうくし　雪山
見通しにまゝぬ原なりけこ子　滅之
葭雀やたくしてゝ芭かけこなり　古　山外
葭雀や芦の志ゝふ日にち日　沸甫
蝙蝠やちゝ絡にとめた明にハ見る　田鬘
かたかりやおて来ハそよく西明り　由像

## 蝙蝠

## 蚊喰鳥

【箋】此事一切の禽史にこゝえ其江来にあり橋のちひさ起りの
にして亂食なり黄昏人家の軒まちりを飛行し故を
喰ふ俗に故喰
事といふなり

鶯龜のことく然ふ市や鼓吹鶯 ムサシ 玉山

鹿袋角 凡鹿の角春落て生ハ茅角生て夏長さ
雲長さるときを伴角といふなり
このゆさうなるふりを茅の伴角 水壺

翡翠 夏とも秋とも訪り
古池や翡翠ひとつ置ゐし 祖紹
川せきや飛うつる雪を我に新 玉碩
翡翠や日和に日の水をつくし 壺長
川さきや汐に ゆらるゝ杭のうへ 芝薫
翡翠や訪ゝの来も同し杭 久栄

川せきや絶て風なき江の柳 下毛 一龜
日の訪る方に遊ぶ通し鴨 ムサシ 接泉
峯にある湖水の廣し通し鴨 、 露靜
老鶯 訪ゝに生ぬ夏鶯の青鶴の水 兎以
黄鶯や籠なき生ハ老を鳴 エキユ 其則
飛蟻 ハアリ 見たし見たし日ろ見ん絶ぬ立飛蟻 古 禾葉
蠶蛹 カヒコノマユ 中国をつくらんとする時葉を食せずして身白色遠くなる蚕を擇び榎の中にへ生先麦葉或ハ葉種売をもつてかけてこれへ
にへ生て蠶の寓居とす数子のうひ出
是に出ありて繭をつくるなり
うるはしや蠶の繭の干物の里 秀子子

蠶（ユ）簿（ヒラ）

蠶もまたやゝ用の糸とる日数うれ　氷壺

うひよを養ふ筈なり其上なる旅しゆゆを
つくらし　むるこそのなり

月に干せば桑の葉もとつ蚕簿うれ　連里子

是ぞうこゝ所用立しえひらば　氷壺

蟳（カサメ）の子

蟳の属にて悉大なるこそのなり前の両掛長きを尺余五六寸甲蟳子を生まる　蟳の子は赤とく売の外抜の下なり

卵あり

枝蛙

枝蛙なくや木の間に角の入る　上サ　五英

見まもせばふるつなり亀枝蛙　下毛　種好

喧しきは嘴を靜や枝のもとつ　丶　巣欲

新垂の蛙に宮もなし枝蛙　シナノ　ノ左

蛙の子やそのふる雨の新つくし　ヱチコ　雄麁

えもの子はちりてこのくるゝ簀子は　下サ　ト外

蛙の子は二三都のふに出さり亀　テハ　雪山

鰹釣

喰ひ殺しの蟲なくつまる松魚は　如白

釣上る松魚や舟の漕ぎ絡　ムサシ　桐鳥

人に棄はたりの付る鰹の形　鳥芸

初鰹

庵丁を叩てこれり初のつを　在尓

仕合や粥母子とりて初松魚　節之

波を起るいきおひとえて松魚舟　崇我
得りなき住居流遠しまつ松魚　古眠
咲ふり咲も華さなり初のつを　義交
老の手に提て松合ぬ松魚が形　ヒタチ　鶴彩
初松魚何をかたしきを習ひの事　上毛　琴堂
遥の事て買人の付る松魚代　シナノ　白外
黒むれ人の寄かり初のつを　ムサシ　仙友
生蔵やしらへ望なき　佳蔵
夕けしき扇ならして通りの里　奥州至　弧什

生節扇

水跡て望をまする人の扇の事　菫城
持たし扇や冬むまるなし　ムサシ　不由
のさし津山流よりるのふきに　丶　森松
宮なき風や扇のうち表　丶　関水
雪の何る不二なさしき扇の礼　アチコ　葵史
知らく男をさす流のまや白扇　丶　常晴
さし傘の下や扇のきひふり　下サ　有隣
夕ゆきの手をとりつる扇哉　テハ　五風
物書ハ扇をのり社廣昌の事　下毛　圃涼

## 團扇

さし当る團扇かしこし門畔し　一具

昼寝の人に木を見せたる團扇かな　龍水

垣越しに貰ひし團扇ちらちら寺　精丹

見たる人出来ぬ所は渋團扇　巣次

團扇もてゆかりや主や麻几　スルガ 是路

## 木布

麻布 葛布 蕉布 等の曝さらしたるものを生布とも云
生布に用ゆ

雪白の見えしてきげちなき木布かな　メ芝 其泉

## 汗取

汗取や身を綺羅のひとへ干　弘什

## 汗拭

作りものゝ人やちなみあく汗ぬぐひ　路池



## 㡡

あつちらち地へ降て汗ふきぬ　慈玉

見るもちかき心の垣や㡡へ　島以

蚊屋を出て見え六つ迄の蚊の䒭　古 田人

芳艸や蚊屋つるまゝその夕まぐれ　葉城

白ひかる㡡や朝のまぶしき　シモ 志考

㡡は肩ひやつく夜半汗ま里　呉 業里

## 蚊帳

蚊屋に日射す近寄て川水　暖風

蚊の闇ふ声の風も蚊帳かな　古 朝陽

名残あく寝るに蚊帳作　詠之

日傘

淡路ゆくや日傘のうちの蝉時雨　逸淵

旅人の日傘さし来る都かな　古　西馬

提げ荷を預けてのぞく日傘かな　イツ　松宇

一つ也主の心の日傘かな　菓皎

鮓

•いひすし　•なれすし

•早すし　生鮓六月出之

松風の身にしみる鮓のにほひかな　由儀

山寺の庵にすてる雀鮓　逸淵

のこる香を見て身をしや鮓の石　古　雪里

磐にある苔の名もなやすしの桶　潮月

新茶

傾る鐘を筆さくや桂もし　尾村

芽蕗も先その翻面や一ト夜館　山子

忘れしと雪もの袖に出す新茶かな　古　寥松

雅ちまの友あり旅に新茶時　鼎庄

古茶

見をも入麻袋の茶に新茶かな　苣磨

初麥（アヲサシ）

勇の夜や古茶のこの気にうち残さ　永壺

青さしや艸餅の種に出しけん　菊

麨（ハツタイ）

麦こがし

青さしや雨に言めて挽きしめ　菓皎

新麥　麥や堂の家にも出生　佳苔
　　新麥やひらき畑を別　俵　桐左
冷汁　冷汁やおそひくの向縁手　孤什
煮冷　煮さまし也筧のちとる水の外　ヒタチ　雙岳
干鰒　干なまハまく汁ぬ常ゝ海豚の面　古　遅流
塩烏賊　塩烏賊をめつらしこのるや東人　下毛　思成
蟹鯷　猪鼻の酒もまゝゝぬ鼈云しき　ムサシ　富喬

冷麥　冷の字をつきて秋を出すハ
　　よろしこのしき
　　冷麥や花波のうつる猪のぬ里　ホウラ　翠二
　　云や麥や海のこのをりかとしく　椽　ウミク　松偉
　　冷麥や居り出して猪をつく　下サ　其岳
　　冷麥や出て居さう東水の色ゝ　加七
　　色や麥や外の新さは家雲殿　マキコ　竹文
毛虫　捨處笑て筆のまゝ毛虫ゝ　卜外
　　質を来て黒来れりくも毛虫ゝ　誠之
　　捨ちまて色くなるなの毛虫ゝ　ムサシ　賀松

捧振虫

子夏や世にまむかへ蚊あまき　二八　豪

子夏の夜紙寄も蚊うち浮沈こ　喰　同

捧ふりやたゝ風にけて皆しつむ　古　梅間

蚊

蚊柱やむこ舟おさへてつまる丹　抱蓑

人来ゆゑ蚊の鳴尾のかゝ　京郎

壹ノ稱くに人なへく蚊の社つれ　由磐

叢を蚊の出るこのもの鳴りにけり　尾村

雨の蚊や只鳴ものゝ家に入る　稲漆

浮雲しや廿し居る蚊は伽にある　波[illegible]

蚊遣火

朽の事し丹を豆の蚊紙さまたれば　連里子

蚊柱や垣を祈りさ[illegible]苣の丈　乙也

降法のる宵や戸口に蚊の寄る　下サ　水海

蚊の夢や雨にある夜のひとさのり　丶　雨具

鈎舟をむのへる蜑の蚊ゆりこの事　溪宗

家さとにたゝこのりも家き蚊きりが　漁藻

鳥告る鐘をうし語に蚊やり隷　不染

川風のこのき住居にも蚊ゆりかれ　森久雄

蚊きり黄さ[illegible]ひと間にもき鳧　下毛　種好

蝿 ハヘトリクモ 虎

蛭

蚯蚓出

蚋

蝨

浮雨に来ふりのこのしお、きゝ事 下サ 司玩

塲もうへさ蝿を蛭の上にこの形 水壹

田の蛭や水うまうせ蒙て来る 孤什

ぬ生足についてあり上りぬ小田の蛭 エト 文志

出る苔を知るものをのしき蚯蚓に 佳苔

苔間ふて居るもふとにさし生竜 由儀

蚋飛や蓑着ゝまゝの畑庭り 巣欣

寐変をノへにこせるや雷起しひ 古 一具

世ハ夢と悟生て雷のいとき茶 村茶

蠅

汗の雷ひ移りて行や名取川 葱玉

春もまてのゝ雷に寐る生活舟泊り 芋宇

寐て居ても日和を雷に起る生竜 ムサシ 磯石

雷ふとつ手の多るて逐し 白里、 柳圃

蝿をうつふり見てをのし簾出し 漁藻

物を待をりや見て居る蝿の業 波蹄

ひ出る也て陳ぶく蝿を多き竜 上毛 文鱗

蝿に屋をふり労生てや叱る 高 ムサシ 海蹄

蝿打や豆の時斗を、ゆてのち 嶮風

蜈蜒

蝸牛

這ひ行くは志るし 殘りて一めぐり里 不知作者

何に逢ふやうてたふるすを蝸牛 京 芹舍

蝸牛測にのぞむや篠のさきに 古 桜室

そこちかり牛に却のふ所のうつかり 魯心

角出さはたはた寐にの所のうつかり 金 澄月

棧嫗よりとき角出さや蝸牛 、 菓嘯

墨る日を我世おろかのこと津かり 、 松溪

神嶋のあとや地をたふ蝸牛 由儀

角のくさるす所をしらしうつかり 巣岬

鶉

鶉をおくに鐘にも遠ふやおくつかり 下花 後麦

・鶉飼 鶉舟・鶉縄

よくらん年八さく波焦さ鶉舟かれ 溪寓

鶉飼舟月の雪漱へまたり来り 由儀

陣りてはふり流るゝ鶉川のれ 貴邦

くらさるゝ田畑も持てゝ鶉飼かれ 三くに二

明かるる角を去しき鶉川 二 雄飛

鶉の鳴ふてをとるうふ所かれ 後麦

人の遠くなりしや鶉川 二 東遠し 天 灌河

青鷺　青鷺の出てゐる堤の蔵明り形　青柿

青鷺やはなのを捨てく歯の利　テハ　素山

結夏（ケツゲ）　[四]佛者の夏十五日より入る出世を本つ夏と云七月十五日終る出世を解夏といふあり此間九十日安居して外に出せ

艸木虫の類をも傷んおそれ

おそるゝ心を名あり

安居　[形]安悪期此住を居といふ程[釋]に委し

夏行のみあり

月のよきにはしたる安居かな　葉枝子

食るまでとりつゞき安居哉　ムサシ　文種

月花し忘れ人の安居の事　、盛月

黄蝶まで人手にのけて安居僧　、三叫



夏行　悟りの都にあらずして夏行かな　如白

夏入　東の国に寮のふさのる夏入の事　士教

松風に耳をはかりて夏入哉　警眠

氣のちらで雨あるこの事　此夏に入る日　金風

赤さらの我にそらして夏入の事　如春

夏籠　・夏所・夏花

夏籠に明らか硯の二筆の新し　沛風

夏出そりやそれも山の形の庭りまつ　由儀

夏こそりや芒に似たり人志語　安以

夏書

潜上ゆうよりたらせ夏ゆれ　漁藻
地の子に相居さしは夏也の事　鷺城
じとり居替は堀はまたくあきて夏也代　寿哉
水さきを心のこそよ夏是この水　猿彦
風かしまつ来は種を夏也　栗洲

苕草（ハキ）

[太函]地膚（チツ）夏月実を下して生き葉にこそ東州より水を
長く深緑色夏月高さ二三尺に白色をしるしき不実を和
まふ此茶食用しまし今昭の病に一番夏食はせば然又朝鮮
たきしは形状お似て根の上より枝を生し　荳把へ大まして紫色
高さ三四尺此茶この事かして
幕を来ましたるこのし
お生よ花きて伸て春り色　小壺

藜（アカナ）

何しらないよりて葉をしぬ藜かれ　花海
葉をふくむ霞のあしまぬ藜の水　杉暁
此ものの濃緑に茂りしなのさ葉　上井　雨桐
かあし夫は伸しも二本藜の事　仏豊　遊里

海羅干（アリホス）

伸を結る白帆見たのに殊のり干き　紅順
ふ結り干き廣場や弱も来て遊ふ　鶯月

夏野

牛の資の部と雨々ふる夏狩かれ　ヲハリ　梅程
部と押る雲のこのふさる夏狩の事　花潤

夏山

夏山は蕃見たのあしてふて出り　古　曲水

夏海

遠のかゝ志つかあり夜の海　古　望水
照かへ其日のまかしさや夜の海　在尓
昇る日に霧よあめまたかつ紀うこ　古　眠
日かたしのなえまおかまや夜の海　箕山
永樹を飛鶴まはしやまつの海　古　節之
奈載の遠のこえて夜のうみ　得　蒼
空うゝ見る夜の引明や夜紀海　祖　白
月の夜よのる舟多し夜の海　水　春



五月

・さつき・月見ぬ月・極月・仲夏・義林・夏至・共種
・薙賓・皐月・早苗月を略してさつきと云り律　薙賓
よかるゆゑ
月の名とす

何しかは物たのとらぬ皐月かれ　由　蟄
鳥をのるまゝよさまり五月雨　下サ　十　條
神垣の清らし咲をりさ津きさ　雨　無
君かゝる我よるゝこのく五月の雨　上サ之　桃　紹
いそかしく生日を送るさつきかゝ　山　祐
植さゝし是ひとつ大きく五月の雨　景　常　晴

賀茂の足揃　朔日競馬の
雪ふるとあり

面白しなるし賀茂の足をうひ　弘什
智も仁も掬ふ家信を足ならひ　祐之
せり津めしのうやふたりの足掬ひ　粧月子

松本祭　一日江州大津松本にあり　●獻菖蒲　三日あり左右の近衛兵衛衛門の六府あやめ孔奥を南殿の階の東西に立又時の花をおりて同しく置云々　公　●菖蒲葺　四日主殿寮家ことにさうふをふく　公

供早瓜　拾四日内膳司早瓜を供せ山城の国古園の供せる事あり

五日の節會　●あやめのかつら●あやめ孔奥天皇武徳殿に出御ありて宴會を行ひ其座臣に酒を給ふあり人々皆あやめ孔かつらをのく典薬寮あやめの薬を奉るあとあとあり　公

端午の節　五日あり日ふちまきを食せるすあり　公　粽八川端色葉より御所へ調進せるすにてうの家の名物あり

重五　五月五日の故に重五と云又端五ともいへり五月八午の月あり
よて端午ともいへり是もたしめの年といふ義あり

菖蒲　●永き根●菖蒲刀●菖蒲幟●さうふ帯●さうぬ湯●さうぬ酒●あやめ葉ふ

昆明の百節の菖蒲の根万病をいやせ由名百節あけ生とも是を祝へり酒の中へ入れ或ハ帯にし或沐浴に入れるすハ本大にあり　世　季明四大　にハ薬湯のすがりさうふの事ハ所見あり　此ハ只あやめを用る日あるなり刀にも幟にも帯にも湯にも用ゆる事ハ酒にうのふるすハ　嚴雅　にあり　熟に只永き根といふ事あやめの事あり　増

軒あやめ浮世の霧をはらめ鬼　龜得
傘の柄と知とつまをとめ菖蒲ぬ　甘志
菁立やあやめに風のさきしいと　見外
はふといふ事ハ葛しあやめ艸　下本　麦童

刈口は花のうへに赤きさうぬれ　岱梅泉

山川のさゝ縞赤ふつや雨ゆくり　六素山

葺てあら家のきくり菖蒲売　雪山

錢湯を沼にかしゝる菖蒲かな　甚鼠

## 菖蒲湯

## 菖蒲刀

要 五日童子の翫びに菖蒲刀とて太刀長刀を木にて作り是をきそひくらべ[illegible]之

手綺ふて抜て葉ふや菖蒲太刀　雪駒

昇る月のちらはく鑓りの[illegible]　越山

## 餝兜

## 菖蒲幟

幟[illegible]の[illegible]小坂[illegible]　[illegible]



神風の[illegible]ひらめく幟の[illegible]　如白

手を[illegible]幟の[illegible]　静之

[illegible]遠[illegible]のほり　岱梅泉

遠の[illegible]向きく幟[illegible]　[illegible]

[illegible]町や幟　牧　[illegible]

## 藥玉

[illegible] くすりの玉・きくすの玉・長命縷・続命縷・辟兵繒・條達・五綵糸[illegible]五月五日[illegible]五色の糸にて調て[illegible]世[illegible]伊[illegible]夫[illegible]風 長命縷・続命縷[illegible]五兵を辟る[illegible]初[illegible]條達[illegible]辟兵繒[illegible]

藥日

五月五日を
ゆく云なり

菜玉や風に香のこゝろ廣望しき　菓菜子
菜玉や吹ぬきさ迄て香の薦き　米鳩
菜玉やのあしなの灯のうつる　芳艸
菜玉や理を動れてるおくりの　花海
くさ玉にをされ心の脊伸これ　京　如衡
菜玉に風なさたゝぬひと間う東　ドサ　文耕
菜玉や篭ひと重のなつのしき　ドモ　巣欣
くさ玉の向ようぬ白ひの姫　優々

藥草摘

いんさおきふ草の上なり菜ふる　テハ　素山
余愛ようなき菜障庭の艸の露　ドサ　米花
實志なし菜ふる姿の草明り　ムサシ　桃紹
露はこゝる夜明のさまや菜障　如泉
きゝ草をあめく摘や菜艸　イツ　士敬
はゝのこぬハつまで足りるや菜草　アキコ　市猿
菜艸を刈やまゝ夜の明ぬうち　丶　子布
菜草つむや夜足のそひ清く　ドサ　壺長
菜艸を摘ける命延しは雪　ムサシ　如永

[illegible] 優く

競駈（キソヒカリ）

[illegible]

[illegible] 宋隷

[illegible] 葉石

[illegible] 競 駈

粽

[illegible] 若山

[illegible] 粽

[illegible] 土佐

[illegible] 粽

[illegible] 肥後



[illegible] 菓欽

柏餅 百 柏[illegible]

[illegible]

[illegible] 下文志

[illegible] 卜部

艾人（ガイジン） 蹈 蒲人・天師を画くもの[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

艾人[illegible] 戸口の事 菓欽

艾人やうやめ菁とる門のうへ　優々

艾虎 [増] 古事も唐に蓮にて席をはくり黒豆にて或ハ色々の糸にて小席をつくり艾の葉につゆて形にいたしき

て邪鬼をはらくるなり [歳]

いまゝきに朝日の白ふ艾席かれ　萬枝子

ユミ見たのこのましき艾席ハ　糖月子

いたゝ心ましき艾虎の葉　祐之

頂ゝ子のこのまゝ艾席ハ　渭水

新ふのき風や艾席の影ゆうし　其翼

うるめゆくけつりのかゝる艾席ハ　巣欣

削掛の胃 むかし蒙古の夷吾國をおそれんと世しにする飛雲にて戦ひこのちし吾古例にて甲冑を帯し兵具を調へ旌旗を立ちることのやうに蒙古を今俗ようこりおく里と申侍り [増]

粉團を射る [増] 清粉蛮・水蛮・白蛮唐の宮中に端五に粉蛮子を造くりて金鼎の中に置て小角弓に矢をたけて射あてゝ是を食ひすれしと [天] にあり又水蛮をつくり白蛮と名名つゆ或ハ五色をおしく人獣花菓なとの形をはくり清粉蛮と名つゆて端午に祭ふなり

桃印符・赤印符 [増] 五月音いろとせるうとりのきぬに篆文の符を書て屏風几帳扉なとにおきて悪鬼を やむるとさせるなりを桃印符と云りまた抱木子といふ書に端午に赤靈符を作り兵をさくるものも侍り [事]

人に語くさらくや赤靈符　十廿　梅禎

百草を戦せ [増] 古事も端午に色々草を合せて猿頂を牽ふことをふせなり

戦ともに州や百学余も見ゆる　仙月

百州やこゝろも葉の新ならず　トサ　月梓

戦ともに百州にかゝる葉藉うれ　巣欣

蘭湯を浴る　五月五日菓をくゆへたゝゆあとさるゝ　大　にかゝり

是ハ今の世にさし物の起なる所し

鳧の羹　鳧のにかゝりその　事　端午に鳧の羹を百官に給ふる事

漢史にあり

にかつきにて鳧にもとふ花菖蒲の馬　巣欣

あつきのや鳧ゆゝ出ゆゝ鴨の味　松頂

鴝鵒（スエ）の舌を去　零　鴝鵒を飼て五月五日に舌の尖をきれハよく物

いひ夢ゆめさやうなるゝ鵒鵒にまとゝりと云く　事　獲

此事をこゝにきに又エとしのあつ事せり鳧なり　そ　クヨク寄之　本

鴝鵒鸚鵒ともにくろつぐミと訓ず五月五日舌の尖をきれハ

よくく語ともなきて夢を清

越なりと云く

競渡（ケイド）　ふなくらべ・鳧車（フシヤ）・水馬（ヰロン）　事　是皆唐土にて五月五日川に出て

遅速を牟ふるなり　糸　素鵝にハ此

事なくのまゝしにいつの頃よりか長崎にはしまるも崎大波戸といふ

入海にて五月五日六日毎日水馬の大興あり此歳屋原洞雄に

深くうせしより起りて

後世古の戯事をなせり

浪風もなき御代ふりの競渡うれ　鳧成

日にむかへ進ゝおくて競渡ゝ　巣欣

たれろんや霊いさめに興ゐる　祐之

水馬（ヰロン）

騎射　馬弓　年歌　五月五日宮中院にて黄の里弓を御覧せし

なりしかれを馬弓といふ

そもくの行儀也騎射の流し詔　優々

左近の真手番ひ 増 右手の馬場のまてつかひハ六日なり是をひをりの日といへり五月三日ハ左近ゝ所にて書ひ四日ハ右近の荒手書ひ五日ハ左近の真手書ひ六日ハ右近の真手書ひなり此日近衛の陣分褐の屍を引折て蒸る奴よひをりの日といへり荒手書ひも同しさまなのらせ手書ひ正日なれハ是をひをりといふなり 愚 是ハ左右近の馬場にてあるに於り弓いるゝなり豊楽院の綾射と云なり 河 左近の馬場ハ一条西洞院右近の馬場ハ一条大宮なり云々 夫 長き根の花の袂よりのをるくりふ真弓のひをりなるんと後粉飾臣の歌あり

橘は何やめはこのをせ引折りの日　世負

馬場とのを引新たんひをりの日　龜水

いさまいき例ゝ今し引折の日　甘菜

争なぬ袖のひらめく引をり柴　如白

旅なのらるをし学りしひをりの日　龜成

印地打 世 五月五日童の小弓をそそいんちとてまるゝ何の故そや答曰左右近の馬場にて馬にのりて弓射るゝの侍るなりひをりの日とも申なり是等や始とハ申へらん 紀 児童柳の木にて大小の刀をつくり是をさゝり奴刀と云男子の魂を強まるまゝへ跡中を居て山伏の躰に倣ひ晩に及て鴨河の辺に出て左右につくなり旅を打て出戦ふ是を印地といふなり 雑言と称せ 東 石戦の戦せしとまるまでも是なり

稼はなくおくせはなしは印地打　巨月

師の新社見えてくるゝ印地打　甘菜

印地打是はよくしの手の気をきかれ　如白

乳母りいふるゝも用ひまた印地打 ムサシ　文種

中書中 猿のつのきり引かり 印地打ヽ 如仙
お引ハ無るすて 家書し 印地ハ ヽ 文母
猿は子よついひうきれて 印地打 ヒタチ 雙武
鉦ぬ事て手傳こせかり 印地打 上サ 由儀
おちついて子ら猿さりや 印地打ヽ 宮月
打そ書し 印地ハ 馬のさらせかり イツ 雲敬
印地打 見て 忘書かり 舟の破 テハ 鍾風
遠く居る 油所を祝らふ 印地ハ ムサシ 由良

神水 重五の日年の時雨ふ書ハ急ハ一竿休を砍書ハ休の名の中ハ必水ありとりて猿の肝をもつて丸し用ゆ書ハ心疾の積聚を治す

神水や志ましし宮ゑんておりる庭 仙角
神水や鐘をお呂ハとりに出る 麦秀
神水や常とハ速ふ休の色 優く

加茂の競馬 増 五日・くらへ馬・きかひ馬赤方黒方とて左右につかひて馬かつ麁きるものありちらをゆひ猿頁の木の下にて猿頁を渡す

栗猿くさ書このましさやえて麁馬 其心
何やふきにしき上手何書えらへる 土毛 楽堂

風ふくむ袖のふゝ世や競馬　卜外
無造作に来のうゑて居る競一るべ　巣欣

藤の森祭　五日当行武者隣馬武者数多甲冑を着し旅さし物をして征鼓を鳴らし神宝には大方なりとかりて厳重なる行粧にて氏子の町々を神幸あり

五月の鏡　端午に銅を練て鑄る鏡なり

●宇治祭　八日きんかりといふ事をもやしてまつるなり

今宮祭　九日今は十五日紫野にあり さつり松と云所はしたひく

●室の明神祭　十三日

両社祭　廿三日近江国坂本にあり

有無の日　廿五日村上天皇の御宝忌なり宮中にあり此の日にかゝりや疫癘日にあらはれしも故おほ来る事侍らず又急ぎ来しと何事ハ縁に改るなり

さて有無の日とハ申なり

有無しの日や国ふりの御りさ紀　ムサシ　文種
御り給しの日や拿にとする種の色　、　緑波
有無し給日や傍に生て笑　下サ　一亭
有てよきとあり此の日は暑りべ　ヒタチ　素月
風ふくも有無の日もおもひなり　の篇
御り給しの日や小腹のその覚え　飛海
鳴なくや有無の日は親たてそり　テハ　嶂風
有無の日にハ塩屋のけふりうれ　、　雲仙
御り給しの日や一とせの数のうち　上サ　梅雪

寂勝講

賑給（シンキウ）

清涼殿にて行はる【徒】法護庁と云ふ所にも此事あり
年中行事に五月のこと行はるとあるなり
【を】古事に以ゆしき民に米塩あるを出ふ事を京中の條り
小路を分て検非使違承て是をひく

娠給や身のちの人も立ずし里　藁雅
娠給や蛇りのつきし髪の色　下サ　春岳
娠給や人の中にのち人の出る、　東恭
娠給やそつとしたゝふく泪　ムサシ　龜成
しんきうや是も惠しの一帋　巣欣

竹植日

五月十二日中陸日とも又中迷日と云此日中を裁事
ハのあらしきそつとうや
中うゑる日は事ふくて任敵ぬ　尾村

中植て人に両問ふ日誓う礼　秀云
異し人に中のせう行の植場う所　呉城
今植し中の志すし所むまひ席　嶋風
竹植て外に外にいふて宵麻う事　テハ　月思
裁つ事ていんてゐる中のそよきにて　イウ　如藤
竹うゑにうゑまゐ百おにたらぬ庭　巣欣

住吉御田植

廿八日摂州住吉神社御田うゑ

●大原志

おはらさしといふ丹波桑田郡に御り廿八日祭るを云

山田御田扇

【獲】大神宮の御田うゑに五六尺ある扇を清くり株の
先につ事て神官に事をおかりいん物の法人に植さし
よつて此の名なり

山脈もやつ生日本氣や法田扇　溪高
田の出来も今のこの志氣て法田扇　粧月子

芒種の節　五月の中なり

夏至　なら海の宮まで夏至のうてそりべく　優々

梅の雨　黴雨（ツイリ）五月の苦より第二の壬の日より梅雨と云なり本に
なりまた黄梅雨ともいへり

明よりて月をこのくさもや入梅の雲　魯心
梅雨明や春を寄り思ふ朝　巨月
入梅さまや精に起るなりより　由之
明陰に春もつ相や入梅の月　青舟

皐月雨

仮初の時雨を明や梅雨の鳩　下元　徐繊
何も明にしまゝて入梅の海社上　安分　俊月
伸縮る草もの云なり梅雨の内　優々
黄雲の夢にも入梅を舎にけり　海子
五月雨や池に深ふちり相葉　京　漁藻
さゝだ雨や小海老をたきむ足の精　アハ　麦鳥
五月雨や庫よりたくなる事　京　京郎
さみだれに海らぬ色い簾の事　村志
白じ事も宇やしを朝のうきみてくて　乐山

五月晴

さみ高雄や仲の景色の時ゆかり　下毛　宮祐
伸る朱に宮先くらし　五月雨　ヒナシ　お月
おとろくや小ふみきさつき晴　逸渕
七夕に初て夜も出来て　五月晴　古　祇白
物とまれしてさふりや　五月大雨　上毛　蒼鶴
出る舟のひとのこまりやさつき晴　ヒナシ　酉山

五月闇

あふかりと字大汐や　五月雨　淡高
遠出る星もこゝろかりさつき雲　暉光
川下に網うつ者や　五月ゆゑ　重精彼子

ひとくと汐さゝ者や　五月雲　ヱチコ　子布
黒谷の寮社明りや　氣月雲　、　棄居
火も焚き人ハ何してさつき雲　上サ　畝月
星稀に五月の雲社白ひこの雨　ヒタチ　湛水

黒舶

白だく滑　梅雨中の空合を云なり　礬ハこのきくらして今
ゆゑ降やうなる空のうちに又あのるはしきあるに銭黒さく
といひ又小雨ふりなのちおくさきもんとしてる常しきこのうちを白さく
とひふまや夕くとに蓋のうる空の一出きりされてあのうちなる
を夕さくといふなり
なるべし

黒さくや夕めし字き漁洲町　馬子子
黒舶や波に沖の高　乙也

黒ちくやいかれてもしる菓り里　下サ　赤岳
く後ちくや菓りら明るき磯の松　樹石
黒舶やひる寝のおくら上て見る　拙誠
黒ちくや水学はこれ花白き　水蓋
白舶やひと舟遅き佐屋泊　ムサシ　菓交
ふちくや増屋りのまる降溜り　赤岳

## 虎ヶ泪の雨

廿八日曽家祐成かうられたる日なり其妻虎は御然傷せし故ふ降るをかくいふ
蚪木より人をぬしまや虎ヶ雨　一宣
田仕るのも出来る降なり虎ヶ雨　一亭

霖のまつのよつとのるやとらう雨　エチコ　岸晴
今の世もまつとも志を出て虎ヶ雨、　子布
菓ゆと降る志をのひぬ雲らう雨　ヒタチ　湛水
布ふとはふ志るし斗や虎ヶ雨　テハ　河暁
常なしぬ日なり雲くとらう雨　下モ　秋月
覚悟して傘漂まり虎ヶ雨めゝ　雲龍

## 祇園の御輿洗　三十日なり

てうちんや古輿洗の夜をてしに　下サ　庭花
豆退や古輿あらひのひと競ひ　由像

半夏生　増　五月中より十一日めなり此日つくるまで菜の類を不食といへり

伐株の葉も芽をふく半夏かな　サカミ　影私

すむしをふ麦や半夏の山つゝき　下サ　花眉

夜に入て[illegible]の頃り半夏生　上サ　雨月

初蟬　月　蟬の初声を夏至の節にいふ

初蟬の声や[illegible]ちのら　氷山

富士垢離　五月廿五日より六月二日迄不二行人毎日川辺にて富士を遥拝す是不二垢離と云

富士ほどや[illegible]山のこゆる川　亀水

鶯音を入　月　反舌無声とあり

[illegible]入[illegible]庭[illegible]　花右

真菰苅

川[illegible]真菰刈　上挙　柏舟

[illegible]女なり[illegible]真菰刈　下サ　甚岳

村長は遊び[illegible]里　甚渕

[illegible]刈りてある真菰かな　蒹葭子

花且見（ハナカツミ）　[illegible]　[illegible]菖蒲[illegible]　無　[illegible]五月五日[illegible]古[illegible]

[illegible]

魚[illegible]

[illegible]

## 申酉の花（サルトリ）

[illegible]

さるとりの花や山路の石ひたり　下毛　梅左

[illegible]

さるとりの花　[illegible]　ムサシ　其渕

申酉の花や[illegible]　上サ　梅禎

さるとりの花や[illegible]　梅雪

## 藻苅

丁刻をみてたしめたる藻刈ぶ　下サ　菅玩

刈殘る藻や押[illegible]　竹甫

[illegible]

苅[illegible]藻や[illegible]　ムサシ　龍友

## 藻の花

[illegible]藻の花を見てたり　ヱチコ　東橋

## 萍の花

藻[illegible]　ムサ　清民

[illegible]　[illegible]　雪

[illegible]　田[illegible]

藻の夕[illegible]　[illegible]

## 百合

・ひめゆり・さゆりの花・鬼ゆり・鶴多ゆり
・うれこゆり

岩たれに 百合のさかりは　巳随
竹ふ見ハ是とまつ季 何り百合の花　甘菜
岩たれ 雪や笠にたゝ里とゆりの雪　鳳什
百合の雪れふとまる風や 麓越し　三交

## 紫陽花

・四ひらの花

紫陽花や古無一葉 花のうへ　古 沙陽
何ちさゐや河内見おろす宮の先　古 徐全
紫陽花やくれりにつまてうゝ候　無 桃仁

紫陽花のう都ふ色や秋さらふ　尾村
何ちさゐれ色をつ雨の降にけり　ヒタチ 越山
紫陽花やらつかりの降し松明の屑　京 然池
あちさゐや下ゑ志めらぬ 緑雨　誠之
紫陽花や翌日の章さしのこゆる色　巣頭

## 紅の花

・本指花

球下へもちのきて注来や紅のたれ　苣麿
田少なれ里とさふりぬ風にの花　下サ 笠頃
霜はれ生ぬうちに指ゆり紅の花　、 壽山

指むく人に手さしかへ和の花 ムサシ 如水
和花指や両なのら日のあらはれ 穴 イツ 淡山
眼のまゝる花の照りあり和の花 シナノ 毎月
昇る日や指に露けき紅紅花 上サ 雨相
色は雪も何る我名にして和の花、 成月

## 花菖蒲

梁 梁の武帝の母張氏菖蒲を見る花を生ず光彩照物にして世に何る愛にあらず傍人に於て見ず回嘗て笑ひ
ゆるを老ゆるさに富貴なる色し依てこれを呑む此月武帝を
生ず 年 花菖蒲ハ白菖の属なり其紫水菖蒲に似て色淡者
色あり陸に宜しくまに叢生ず五月一莖を抽て莖端に花を生
ずこのゆゑ蒸子色の如し紫淡むらさき紅淡紅白木の数品あり
花莖を生ず一種花なり色を無らく故に出れをむ
菖蒲と云一種花なりや色を無ふ其の何り別種也

嘉永年間より花菖蒲流行愛ゝにて淡くる江戸深田川の
東堀切にある里ハ其内に名高く見物の人原集せり
蒼ら生て勇るしかり花菖蒲 花暁子
むく鮑の眼にさえんくしむさう姫 不深
橋なりて尾りもありて花さうふ ムサシ 北岳
数なりて眼のゆり紅紫淡花菖蒲 下サ 宋有
鳴遊ふ波にゆるゆるや花さうふ、 古郎然
生なりそよく風ありむさう姫、 十條

## 紫羅襴花 ハナアヤメ

大本 花史に白菖 本 二種あり一種ハ淡深に生し根大にして肥白く節疎なるその白菖なり俗に花を泥菖

蒲と云一種溪間に生ず根疲赤節稍密なるその八溪孫にあり
俗に是を云葛蒲と云 白葛(アヤ)葉花皆蕊子花に似て疲ふく
其花紫色飛蕊のこゝちのあるし白花なるゆゑ淡紅なる物なり
花さうふに濕ぬへのしまを

以つこのしきそのゝ紛ぬきまゝむこのやめ　桐左

ちひさなる庭に似合し花あや花　佳菅

石菖　石菖や葉をふゝ結し眼をうつす　沾嶺子

忘草の花・えそん草の花なり・萱艸貞徳曰夏をつまるゝ
艸といふ事なり

萱艸の花と斗やつまれ艸　左　東山

金銀花・忍冬の花なり・まへうつノとも云

もうとく咲けと夏のはし金銀花　下サ　玉頂

法林の園ひたつ生や金銀花　ムサシ　輝光

忍冬の花や寒りを掃法くす　下サ　玉清

朝菊　苗冬を屋て長生す高四五尺莖細く葉にして蕚延ぶる
ちとく葉ちしやに似て法やなし黒色にして淡碧を帶ふ
初め莖の梢を抜きに葉毎抽て紫をうつの形のあるし四五月葉
間に紫碧花を云とく初め雙葉のあるとく朝に開夕に凋

朝露草　一名銀錢花と云花の形桔に似て小く色白きくうるゝなり
庭に黒紅のきゑひあり紫ハ三ツ出五ツ出西所の葉に似たり

蚊帳草　坂屋鈎草と云児童その莖を裂て坂牲のこゝちにして
敬ふ事形ちを名に云本名牡錢草なり

夕汐に坂屋鈎草のそのきゝ　桐左

酸漿の花　さいそのまなり

蘭のこのけうこたまの花めつらしや　古　荷分

未央柳（ビヤウ）　[illegible]一名金糸桃花なれは此ハ黄なり俗ハ柳の字を
いふは及ばせびやうの花ともいふへし
日のさせハ花の所のなし　金糸桃　ムサシ　高雪

杏子（アンズ）　隆元の嘯をひこの書なる杏子代　溪翁

枇杷　枇杷の実や價なきなるもまたやうし　祐之
殊されと枇杷の色のきく葉陰代　如白
見たしめの日は黄ひかりしは一把　佳菅
枇杷のこやのしらひの葉も一本きき　秋壺

夏菊　夜華や埃りの中　秋花のいろ　ムサシ　熊山

夜華きハ夜華に成り桂米市　蓮洲

天蓼（マタビ）　白き花をしらうる梅のまじりにかたり
絡度梅と云
天蓼の花や日蓼の所に寒き　優之

十薬　十葉の咲や田へ出る橋の下　由儀

覆盆子（イチゴ）　●木いちこ●えたいちこ
●えちまいちこ
馬埃りにとる雪のこうせしいちこ代　下サ　玉頌
山ゑ志らぬいちこの巣りかゝ　丶　二鳩
凄さうなまてうつくしきいちこ代　丶　米名
持やうに行くこそて居るや枝いちこ　イツ　吾友

早松茸

苞にまゝて手頃をこせて早松茸 ドサ 桑弓
雨の間我見て送りたり早松茸 丶 精中
篤栗にならぬ味なり早松茸 丶 甚岳
志迫し折り出るは稀々早まつ茸 ムサシ 不二丸
峠越せ出立の汁や早松茸 花法

莧 ヒユ

夏なり俗に云やうと云是なり聖灵会に和合物にして
佛なへ備へる理菓なり国六種あり和名の莧は四種々
赤班英理莧なりさへり莧は
五種なり

あきらいふ碧のつゝかさ莧の味 是遊
人さまぬ里にてはなし莧たらけ 優々



馬歯莧 スベリヒユ

葉は馬の歯に似たり
ゆ名に名とせ

根をたちてはく日種に尾さへり莧 藥種
まゝ花も見ぬ間に囃ふ茄子の形 ムツ 一止
をしゑく大きく志たる茄子の形 波蹄
あら鋏なりしてゝ見るや初茄子 ヲハリ 不退
苗うまと行遊しけり茄子 賣 ムサシ 文種
だしなきの物はめつらし初茄子 丶 龍皮
紅霧のまゝにたきぬ男や茄子畑 丶 遊里
夏にさくゝなきをまことの初なすひ ドサ 宝船

早乙(ワサ)(サウ) ・御所にて云ふ・白所 ・于所

洞見て早乙女くはる女この郷　古　蕪村

草石蚕(チヨロギ)

ちよろぎめに世をしのぐ草石蚕かな　上毛　一篇

苅葱(カリキ)

白露やさや刈葱をかう男し垣のうち　優之

南天の花

南天の花やあやの手雨にさく　上サ　素然

南天の花我をこそや手水鉢　武サ　大車

山梔の花

山梔の花やにのまち日影さの里　龍羽

山梔の葉て明りうすき里川　イツ　士峩

くちなしの花や髪老めく門この主人　下サ　玉濤

五月躑躅

山梔の花や七の花八表こそ庭花

圏　五月に咲つゝしあり俗にさつきと斗るもさつきあり五字八杜鵑花之花ともつゝしもさつきに及ぶ

ちりわらと五月躑躅の景りかな　イツ　梧井

葉さゝ水にてさき五月のつゝじの水　優之

生胡桃(ナマクルミ)

木のなかにある枝も紅の生くるみ　令

花柘榴

花咲て赤い筆の先柘榴かな　仙肖

我手の名形をこうや花柘榴　下サ　其岳

名ふ世て垣に花さく柘榴かれ、雨　奥

榊の花

このさゝも榊の花散りもし易し　上毛　一嶌

子宮掛神の榊の咲に帝り　ムサシ　花調
花咲て出とはさしき榊の事　仝
注連張て榊に花の咲に利　丶　雪渕
花の香風もさゝぬさの起り物　丶　一峯
注連の帯るまゝにおれば榊代　下サ　庭花
青梅や宿義の春を愛うつゝ　逸渕
青梅やこのよりき枝を水のうへ　秋夕　接泉
青梅や木戸をたゞしき面くき起　シナノ　東布
青梅やとちく落ても草の中　イツ　杏壽

## 青梅

李（スモヽ）
楊梅（ヤマモヽ）

遊ふくの時袖のうちにおれば　下サ　花月
あるち霞雲子のおとくにて味ひ梅にかたり　ゆゑに名
いくしき色初め青く味破く日を重て甜く味ふに熟し
て美なり葉は柳に似て厚くちとひろし
上総の山中に多し

楊梅や何にも似しとおもふ味　佳菅
やまもゝや葉に開まれて実の見えず　桐左
何にもとらて試くたまへ青山椒　龜得
橘や定家相のおきとまろ　古　杉風
たちたれのひとこのへある匂ひかれ　古　壽渕
橘や何とおくまゝにおもふ　下サ　玉清

若竹

[illegible]

今年竹

[illegible]

田植

[illegible]



[illegible]

早乙女

[illegible]

田唄

[illegible]

早苗取

[illegible]

吹きなるもなかれとそのくに笛に　上サ　五英

若苗　若苗や蔭になる木の枝を伐る　下サ　玉碩

その苗の色にも初めや早稲おくて　優々

青田　少まに見えたて小島の青田うれ　影左

眼に暑く蒼の動くつく青田の東　蒔栽

二三枚出手のかかるも青田の形　春峨

いさきよ起風う布なの後青田に　秋仙

都に日新さして見きれぬ青田に　古　一賢

月花のかに青田のなのめかれ　テハ　瑛山



簾にもうつる青田のなのかきかれ　下毛　後麦

麦刈て語も青田と来に市り　ムサシ　花船

さもくと夜の明るくる青田の形　丶　暉泉

川越しに青田見えたる堤かれ　庭彦

田草取　横にさけ日さへも法たし田草取　亀稱

遠近とおもふ日中や田艸取　ムサシ　山雪

汗まてる泥雲なり田草と里　丶　不由

栗蒔　●稈●秬●胡ナホまくといへ八五月之刈る八八月なり

栗蒔や日の落てこの一たらこ　成月

菽植

粟まきやみよ志ぐしき山根畑　優々

雕まてもまたり地ハなく蒔ら忘る　文縫

蒔ら忘る場を買ひ居し地尻かれ　閑谷

縄やのまゝ埋とハなり竜蒔ら忘る　上井　掛雪

空菽曳

空豆を曳し大河くたゝけかれ　庭花

手のるさや空豆曳の方ましらへ　[illegible]　龍成

脊戸口や空豆引し花ふきけ　花海

空豆や蝶もなしまはしまゝなる　麦鳥

繍線菊

[illegible]木と草と二種ありともに五月の花をひらく真紅

淡紅なり其紅のを此雲まいく花の形ハまんしんに似て

集り咲もと山に生ぜ花を雲しく

今庭にうゑる

志もつ市の花を相のまゝ黄ひ竜　優々

夏草

夏草のつきまさまきや通り雨　連里子

夏草や草服を通ま日ぬるてり　秀子子

夏草や畑のとこれハ明やしき　米里

棟花（アフチノハナ）

[illegible]梅檀といふハ誤なりせんだんハ檀香の字あけども誤なり樗ハぬるてとまて白膠木のるゆなり

とおし大戟むき墨雨の棟かれ　瑤蕉子

花の香ぬまとまりて来る棟ハ　米鳥

雨のなるこそのたまひや竜棟　[illegible]　碌角

## 栗の花

餘の木まで黒り浴り花にのぶち　下毛　一龍
四五反れくれりや小田の花　抹　龍成
菊ゐまでハ黒りの追まれ　楝　庭花
住むさろ人なのいまま栗の花　峰風
のりそめ花　栖てもなしうり花　素山
まさ雲の西へたきふや栗の花　蕉正
志ぬ雪に黒くとなりぬ栗の花　上毛　仲鷹
いんるものにせのと待れてうりの花　巣欣
折りこまハ栗もゆきしや花の時　楓九



## 莓の花

涌りして深まさ花や苔の花　古　大梅
花むまふ井筒の苔や塩の糸　梅垂
廉門ハ高てさめてあり苔の花　壯山

## 桑の實

桑のこやむる寐しこの袂より　秀子子

## 藍の花

さりとてハ赤き花なり蕉の花　斉州　秀雪

## 石竹

石竹やゆきしく赤くらるしき　△廿二　里曉

## 梅漬

梅漬の色に成塗をさましたり　波瑠

## 梅干

梅干しに首をとのこける鶏の礼　周芳
うゑ和しの上り花なき日和　小　拱立

## 宵行（ホタル）

瀬田の蛍ハ五月の節ゟ七月まで一夜一夜かけて二夜又一夜かけて三夜あり後宇治甚多り

よく光る蛍ありけり川むかひ　古　雀白

三日の月かゝる水際に蛍哉　京　漁藻

逃るゝものくるゝ手の優なれるかゝ事　、路池

蛍見えて山のあなたの灯となりけり　風竹

消へ去るの光り身に添ふ蛍かな　兵以

雑魚らに混し鎖を作りて飛ぶ蛍　菖廣

参下かる筆に来る秋や蛍　無　西山

町を飛ぶ蛍や二つ三つ藤の花　、暉泉

## 鳩の浮巣

蛍の光ハ地に廣まりて行く水なる　、ちのら

物ほしの果の夜ハ飛しまふ蛍　、来迭

人声も遠く見送の蛍哉　、蘭西

手のひらへの世を見て居る蛍哉　下サ　芝葉

飛ふ蛍まゝ我の去る垣の外　依飛　如泉

とふ蛍夏ハ紺屋の物見し場　呉剣　文窓

余の者が行けぬ所に来るは浮巣かな　巨角

世を去りし鳩の見ての浮巣哉　機高

鶴の雲井にしてむかうき巣かな　松頂

巣のやうまゝとく見えん鳰の留守　西笛

見て居れバ少しゆるせや浮巣守　七年 素月

鳰の巣や一本の竹ゆるぎぬ所にも　一字

流くり留て雲を追ひし浮巣かれ　五鳳

浮つむ鳰や浮巣となりれ居て　楽居

水ゆれて何ふるき鳰のうき巣かな　秀剛

あこのらハまあれて鳰のうき巣かれ　下毛 松風

遠く居て鳰の見えて居るか軽き哉　三條女

軽鳧の子

古数々あるの子ともこの里の子ともなりぬるハ何事ぞ

何ゝすて鴨の子なかり

水鶏

鳧の子や浅みの籬る草の中　尾村

一つゝ数ゝや流れを越ている声　十條

闇の夜やむかう明るの水くらく　鳳

浦風や萩を掛るあく水鶏　蔥玉

さびしさにまくて出すハなく水鶏　圭山

宮島で八治めをきゝせぬ水鶏の礼　素鶴

居るさま蘆のうちたゝく水鶏かな　美文

中京の何それハ霞に水鶏の声　七年 素月

螢のうつゝめハ分ゆく水鶏かな　双岳

方角も志れぬ須りやあく水鶏 ユキコ 午池
花笛のこのたれハもとを水鶏笛 ムサシ 出月
月させハ田も川めくや鳴くひ来ゝ 露彦
芳莊の夜も明のしてあ鶏う鳴ゝ 唖仙
笑鶏の人も討ひ来る水鶏代ゝ 菜晴
人の雫も結るまつや水鶏なく テハ 月昼
荊鶏を芦や水鶏の足だまり 風什
青宮し水鶏鳴やむ何との雨 不染

鷹鳥屋二入

【箋】鷹ハ四季にはなれ冬を第一とす善惡の法あり毛を易るものあり其中冬屋にこめおくなり出来哉



鷹屋鷹といふ鷹の餅忘と云も此時のみなりて夏季なり

【増】鷹のことやハ雑なり句体によるべし

鷹屋鷹もおそりなきしら雨二日 喰風
鷹屋鷹のまつ風志ぬそふりり礼 巣欲
毛をこのへる鷹のたとのゆきそふりし代 仙月
毛をこのゆる鷹や深山の雲こそやま ムサシ 波月
そのく来をおもしき鷹代ぬけ毛代 テハ 掘泉
風うまて居ぬるさまのや羽抜鷹ゝ 影湖
法くくと古巣のそくや羽抜鷹 ムサシ 千本
身つく後ひしてハ走るや羽ぬけ鷹ゝ 波月

毛をこのへる鷹

羽抜鳥

おくる日結ぶ紀ぶ花ひや羽抜 雪 朱山
そのく末にたのらふ新や羽ぬけ雪 鳳什
見逃まや吹矢の先ぬ花ぬ帝雪 トサ 卜外
嶋もせぬ枝をもこへ花ぬ帝雪、 花月

魚築打（ヤナウウ）

石を堰木を陳て魚の石をまうくる物なり是を築打と云築ハ井を掘て竿を爰るぬくにして下モハ石を離るゝやうに志のくるなり魚石の勢ひに陸ぬり来る石を築き家へ飛出るなり其所をとるを築の魚と云

築打や場所の見立ひと工夫 佳菅
山ぶり来て見たり鮎の味 トサ 花月
鮎とりを翌日の荷持に雇ひ竜、 分貴



鹿の子

縄なくる舟のちとえつ鮎の家り、 井甫
鮎飛や次第に東き西社出、 蓼堂
乗魚釣のまとてらつる筏の礼、 乗弓
玉川に光りて鮎の遊ひ々架 ムサ 其春
釣落て鰷の紀のりや水の隈、 鳳眠
関東共人もこのまてる若の子ぶ 智幽
社とりにて親に先てつの社子ぶ 井甫
遊ぶのちこの事ニ牽こゆる若の子哉 鳳眠
そのく艸見てもも若の子結ぶ竜 宋有

獸狩

初て走り犯に先立この社子が　唾風
東新におきてゝ月の若の子が　上毛　有壽
大粒の雨に起まろつく廉の子が　イウ　乙朗
弓杖に見おくる嶋の若社子が　トサ　柳翠
雨ふるまふてハ祝慕ふこの社子の事　ムサシ　暉光
笠をふく風にも怖る若の子が　エチコ　千布
北とおとの嶽にこのくさ若の子が、　この洗
扇にてまゐ起て見たるこのの子歟、　翠嵐
日々後にし男ともあり獸この里　トサ　柴花

躯狩（ゴラヒカリ）

梢ふく風もなきあ枝や祈ひ狩　有心
おとゝく社是へもとるや祈ひこの里　花調
まつ風に拡のまゝりやしねらひ狩　棄居
時をのる星も訶りてや躯この里　笠頂
羅なるの初て居たのら祈ひ狩　トサ　壽山
岩にもひ木の間に歌て躯狩　唾風

照射（トモシ）

出りしハ夜の夜ならきにおくしとはふ鳥に火をとりしてゝ山
中に入年ハ若生ゆゑ国を見る者をうなて射てとるゝ
北と枝て変のこのもるとおし　ハ　エチコ　月昇
狩名脊山にこのる照射この事　上サ　知足

火串（ホクシ）

雨ふくむ雲やとまりの遠うつり　トサ　柳翠
宵雪の末この串に冴る雲をしべ　トモ　一龍
身をよせる木蔭も五つ照射来　テハ　河曉
身にこゝるけふりハ志ゝ火串さし　トサ　以兄
雨あとや串のうつる蘇の事ゝ　一字
見ゆ惠ゝや串腥くや宿の恵ゝ　庭花
瀧川にふ事ゝ串の明り来　ヒタチ　湛一
小白陣夜も焦ゝぬ火くしかれ　イツ　梧井
ふと変こゝえてさしきや串べ　トモ　雪翠

はれそまにこゝえても深きや串べ　ムサシ　葉交
風寒の心さしきや串の形ゝ　さく女
明易き宵を掃山にやくしべ　テハ　五風
霧玉のきゝ山にもうつる火串べ　方泉
行先にこゝえてさしきや串かれ　其剛
月の出て鎌山の雲串志ゝ　鬼　得象

墓（ヒキカヘル）

増　嘉の頼に行りさせと祖翁　細　追出よのひ屋の下社墓の
あつとはへる蛙出羽の国へ入まふての紀なり是まさしく五
月の名ゝ事ハ反の
部へ出まて
掃この事る墓にうまのまてひきこのへる　トサ　卜外

安閑と蓑虫の顔やむきこのみ　下サト　外

蛇衣を脱

白雲に動きまはり蔓丶　孤城

日のさすや蘆にぬけし蛇の衣　睡風

衣脱し蛇いづくの草の中　五心

小鯵

鯵売る里や芝居出来て人の中　古寥松

縄こそ世夕鯵ら里の静けき庵　筆丈

水鱧（ミツハモ）

箋 江魚にして西土にて風海鰻（ミキリ）といふものゝ類也小にして肉脆きものゆへ秋涼歳内にて長き細く

あさくゝ旅よつ事或ハ水鱧とよぶ

去年をいふなるらん

水鱧や月に生姿の小酒盛　松頂



水鯲（ミツエツ）

箋 元来の字俗字也正字不詳元来八七八寸ばかりてこのまゝて ゑに似たりなにゝつけ細くなりて佳味なりとて去年を経て

あまるよおそく切り身に大きくなくこえその生臭きばかり

なきりて酢にて事は佳味とする去年元来の料理なり之

是をいふ

津走（ツバス）

あかや

是鰤の子を小なるとき西国にておくいふ名なり

ともなこといふ去年なり

関やくにや中に送くるつなまぬ　松頂

世にて墨をもちて見ゆるきつなまぬ　七夕手　双兵

単物

丸やと白袷になるもひとくなれ　アハ　蕉條

高めくりたる日よ暑さの単物　テハ　雄風

ゆきた丈のふ足ハいたまて世よくへ物　七夕手　住西

何ことめて着る日も流しや草物　梅雅
鼻席も狭ようおもしし草を紙　ムロ　葉史
草を紙海の夕葉う法里布り　下毛　富峰
地のよきまゝ何まり好まれ草物　ムサシ　文種
蟬居して流よぬせたり草もの丶　花調
結て居て仕裁させ布り草を紙丶　水菊
猿のける石の石とはし芝とく物丶　玉山
きくしさま綺のうよ何り草物丶　粲賀
綺のらよ着う見えたり草をの　下サ　方泉

帷子

新しり居の帷子をしし紀のうち　乙良
のこ新しや夜風のあしむ私さん里　美交
帷子や絡よ着ちまして夜ようつる　梅雅
かこ新しや焼りをいとふ出行ふり　上サ　春松
あよ着る人の膚や白ちゝみ　海子

辻ヶ花　貞徳云つしかぬといつしか花といふ事あり毒き帷子のみ事ハ反よあるなり

洗ふてもも色ハだしこのを辻このを礼　ムサシ　市笠
いまし辻浮けし衝を辻ヶ花丶　旧左
何るものせる子のこの雲布や辻ヶ花丶　晨風

和にまたく白ひ佛や法しの花 エチコ 古棠
交りは乗は似たし 辻のたれ ムツ 壮山
志ならくハ和とうつるや辻の花 下サ 分貴
うまそのや虜にまたける木のことり 海子

羅 ウスモノ
水 スイ 黽 モウ
和 かつれむし 別 水まきまし 篋 水馬虫之事身細もく五六分たこのりの虫なり其文四足なりて身ハ和につのまた和上を
拉るまとこるのまとしまて和るとなつく筋黒にて始めのことに
いふ異本にてハ始めんなりといふて鉛の白ひあり
さし彼をはらふ性なりあるる虫 種好
雨の日にまへのくまてあまし エチコ 雪嘘

豉 マイ ムシ
蟲
篋 まろくひらたく黒き虫にて豆ゆとあり和上にうきめくりてやまきてつくしまて云もちこのきに江東の俗ぶまて



い里と云 拔るに是猶乗まれしの訛云なり 背くらくて後ハ蔭
来し 異本にて志ちもあまきまし と云又さうとめと云ふ也 弋
波のうへにこのうき浮世や水まきまし ヒタウ 淇 和
やこのて引汐とも志らてあまきまし 鷺 咸

蠁 サ
子 シ
酒碪の上なとに蠅飛する小虫なり 拔るに鷺碪 鷹
肉の中に初め堀を生まて羽化して小蠅となる 分黒く
羽黄色大きさ一分に色まて虫めのひを以て見るに蝿と異なる
なりなし 志のうに蝿子に似たるに一類二種なり 卵生と化生と
異なりと也

料理場や何のう湧て蠅子の飛 水壺

蟭 セウ
蝱 メイ
蠓 マイキ
蝱のまつ毛に巣をつくる
小虫なり
和 まくなきハ小虫納に水て乱生飛ふものなり 和 拔る
に蠓ハ腐生する肉色醯溝泥中に多し あるも蝿に似て

翅身皆灰色大きさ
一分ほどなり

蠟（スクモムシ）や 汲さたのりの水 鈍うく 氷壺

こうち 奄のごとくにして大きく身こしこのくぶしつまり
足短く毛 何り木の根或ハ糞土の中に生る者 外黄内
黒し 旧茅屋上に生るその外白く内 うるみ色なり皆湿熱
の毒 熏蒸して化生せし 夜より秋に入て蛻て蠟となる
豪傑のこのきこそのかてもなし 嘈 氷壺

合歓の花 藿艸 うほ 砂利 蠟の廣し 椒の花 ムサシ 文母
とまらせぬ 板なり 時なり 三歓の花 洒雉

六月 こなつき・風待月・なるこの月・常夜月・林鐘・且月
・鶏月・鶴氷・水なし月といふ 遠方をこなつきと云り
又ハ五月ようなし 早苗のこ水 つきたるとも云なり 貞治
云此月律林鐘に 何なる故名付しを鐘の字に見まのへて此ならん
たやしのこのしと訓にいひ
何なる者誤なり 増

六月や峰に雲おくなりし 山 菊
六月や まつる夏の宮 古 蒼虬
六月は なまくさものに 俗なり 田 蟄
六月も 夏 秋の風 鶏の 雨 ムサシ 文種
六月の 器をとまらせ 板川 久礼 トサ 庭花
水無月 水無月や 朝ハ 何なりも 焼くら 菊

氷室守の筆ふるしけし竹生角　去来

みな月にあふきあふせん富士の雪　凉菟

氷売る月や夜半も戸口ハ明ておし　龜氷

## 氷室

増 一日氷室御調・氷のおもの・氷さかな・氷室の雪・氷室のさくら・氷餅など云。貞徳云氷室の氷ハ四月一日より九月晦日まて献せる物なれハ六月一日を肝要と用る故に日に定るなりと云て予今案に四月より献るなれハ延喜式主水式にみえたり。製月なれ共ハ以孫にも氷を用る事ひのおものとなり。源氏常夏の巻にも氷水めされて侍り。千載集に氷室山のさくらをよまれたり。又氷室の雪ハ夏なり去のころの世俗に氷室出る氷に准へて額月に用ひたる也

開く日は裏白をしく氷室かな　古　梅室

六月の客相にせんり氷室守　古　言水



## 夏氷

生て思ひ出る氷室かな　尾村

草木も動かて寒き氷室かれ　金　楼巣

明すまや秋の六菜糒や夏氷　芳州

心まて当の梅に青き夏氷　山雪

手に載て象牙に似たり夏氷　エチコ　芳流

## 氷室の櫻

汗拭て氷室さくらの覗の水　古　子鳳

雪ものこりのかへて氷室の遠さくら　金　竹友

## 忌日の御飯を供す

一日 忌日とハ不浄の火を以てのふる物をきらふ也。内豆腐今食の西神をまつるなり。膳ハ食も遠し内膳司より奉る。高きを大炊寮の御炊にて作るなり。公

一夜酒 [公] こさけ・ひとよさけ・ひとよさけといふはふつくりたれはあまき八
供ずる故なり貞徳云醴の字をこのけり。あまさけともいふ
ひとよさけも夜宿り六月一日より七月晦日迄日吉にて奉るなり

寝のこし針をさく佛や一夜酒　古 蒼虬

さくかわく足投出して並ぶよ酒　ムツ 杜山

居宮も月夜になりてひとよ酒　并 梅雪

篝焚く身をおさへれて一夜さみ　下サ 方泉

六月會 [公] 四日傳教大師の忌日なれは延暦寺にて行はるゝ勅使出山の儀式あり

御躰の御卜 十日神祇官の官人主上の御躰にて占ひて奏聞するなり

月次の祭 十一日 [公] 十二月にも行はる六月十二月両度 諸社にて奉らせ給ふなり



神今食 十一日夜戌亥の二度ありいせ太神宮を勧請申させまして天子みづから神饌を供せさせ給ふと云 [公]

解斎の御粥 [公] 十二日神今食の次の朝日北の庄の大膳にて米一升をたいて供す汁の肴をあしらひ和布の汁物をそへて三口食てこれを奉るなり云々

祇園會 [公] 諸神根元抄に日圓融院天禄元年六月十四日に始
會始今年より行ひ神輿三基七日に四条京極の御旅
所に神幸なり十四日神輿氏子の町々を渡御ありて本社に還幸
あり七日十四日共に氏子の町々より山鉾をかざりて供奉し本社祭礼
儀張行さる甲冑をきて出武者ありて多くなりて儀式厳重之
[増] 御旅所元ハ東洞院高辻公の時に今の四条京極に遷座ありと云々

祇園會や打ちよ風ふく人の中　由蕉

祇園會や棚に月の雲　下サ ト外

祇園會や夜の明けての人の疲る　金 儀水

きおんまや埃いとまもぬ人をのり丶 文母
祇園会や二階建まる人に相生 翠仙

長刀鉾 七日に鉾六本山舟鉾共十七本なり四日に六角堂にて
明行の罷れなり此鉾くしとらせ出せんにさらむ長刀
ハ三条小鍛冶宗近の組にて壽瑞
年しと云々

鉾に乗る人の都ぶりも都うれ 古 其角
鉾にのる児や五色の雲結ひ丶 梅室
新霧に長刀鉾の光りこの年丶 千壽
長刀の鉾や神めく人の形り 優々

函谷鉾（カンロク） 孟掌君が故事なり俗にこのんまをこと
いひならせ

月鉾 故事を志せ非事の今七日の月形なり
鉾の先にあり

月鉾や松原西へいる海山 古 沾徳
月鉾や児の影結ひ出し化粧丶 曽良

鶏鉾 是竟の代に新の為に大鼓を置かし
ちなけなりと云々

鶏鉾や時は告さ来羽のこのまへ 菊葉子

菊水鉾 是九月九日に葉花を海にしてしてこのめハ夜病をのがく
といふ故なりなり

放下鉾 ぬりかの人形なり俗にまたいふ放下鉾の
人形ある故にこのくいふとなり

岩戸山 日 神代の事にあるきまんなめつちいまこゝの生さるとき
まろこの生さるすきの事結ましといふさまにあまの法

なれさしおろしおろしかつさまは日神岩戸に出たりなへるは
しかしまの國のなかのなきをなるをなのしたる体なと行り
占出山（ウラテ） 神功皇后三韓をうちたまはんとは松浦川に出て鮎を
つりまゐらせしなり 日
孟宗山 廿四孝の孟宗雪中に筍をかりし体なり
なのなし山とも云
郭巨山（クハクキヨ） 釜なり山といふ唐土廿四孝の内郭巨山の釜をかり
得たるなるなり
琴破山 載安道王睎ろ伏岩にはのひ琴をかきし
故なるなり
蟷螂山（カマキリ） とうろうの斧をそつて立車にむかふ
古語なり
白樂天山 白朱天鳥巣の原林禪沙と
問答の体なり
太子山 聖徳太子肌の雪を枝の本にこの雪に六角堂
を建立せし故なり
木賊苅山 とくさこのるその原山の木の雪よりこのこの雪 出る秋の夜
の月とのめるうつのさまなり



保昌山 益盗人山とも云平井総昌和泉式部に本をふして
南殿の笛を式部に送らせたる故なり
芦苅山 芦津の國くさうの里にはなつて出る者に付て
芦をこのるをいとなくしせし故なり
山伏山 斧を持たる山伏のまとのなり理源大沙大峯入のなりめ
をうつまとの所
天神山 同名の山二ツあり鎌山路より出る故鎌天神と稱せしなり
何れもの山なり者る時出現の係をまつる故に靈天神とも
云り一ツハ油小路より出るをそて
油天神といへり
傘鉾 同名の鉾二ツあり一ツは近世
野山となるなり
傘鉾の色は青ある河原かれ 優く
牟鉾や雨を待ちもふしぬ出 ムサシ 三保女

十四日　七日は此旅へ出ゐしふ神輿を今日祇園の本社へのぼし奉らせるなり

橋辨慶山　是より十四日の山鉾なり山八本舟鉾一本なり牛若丸五条の橋にて弁慶と戦ひなふ体なり此山毎年罷とらせ一番なり

鯉山　龍門の瀧に鯉ののぼる体なり

浄妙山　宇治川の戦ひに一来法師筒井浄妙が頭をおさへ飛ぶえし体なり

黒主　古今の序に花の陰にやすめるかまとしと書えられる事なり西行きくらとも云

役行者山（エンノ）　大峯にて役のうちそくふ角鬼神を従へめし　つのふさまなり

鈴鹿山　此神鈴鹿山の立烏帽子といふ鬼を退治の体なり

鷹匠山　鷹鳥の体なり人形三躰左郎の人形橋をおひ鯨を くふそいなり右に橋おひ山とも左郎山とも云り



観音山　山の上に楊柳観音の里　恵心僧都の作といへり

舩鉾　神功皇后三韓征伐に帰体の体なり　毎年罷とらせ押へなり

舟鉾やめてこそ園へのぼり風　竹右

舟石ぬや逐風の吹を驚きし　ムサシ　里水

津島祭　津島牛頭天王八尾張国海部郡門間の庄蔵波の里に　なり十四日宵祭十五日朝祭是を里俗歩舞しといふ軽樂（ジリ）船上の挑燈総る二百六十箇一年の日数を象り真柱の挑燈十二箇八月の数なり四傍の灯燈三十箇八一月の数なり宵祭を最も観とせ云々

[illegible]

つのくと明ます津島のまつり　水壺

熱田祭　十四日熱田神社八尾張国熱田郡にまつり　海原記にまさのを社等といへり

巖島祭 藝州佐伯郡宮島にあり十四日より十七日迄舟まつりあり

竹生島祭 十四日十五日あり此祭を法華会と云ふ此生島神社と宇賀御魂一座あり 年 此生島は江州湖中にあり底巖石有精宝珠多し本朝五壽美の所一あり

山王祭 年 江戸溜池の上永田馬場にあり例祭六月十五日山王祭と神田祭と隔年に此祭をあらふ神輿三基甲冑の法師競馬の案神輿の後にお従ひ氏子に頼る所の諸侯もまた警衛の武士を出し数槍を立列祭て群行す○神幸の所路永田馬場より半蔵門を入上覧場をまたり此橋門を出江堀をまたり通り常盤橋にいつを出芽場町の江旅家に至り神饌を献し更より中橋をまたり還幸あり○此祭を御用祭りと俗に云公の産神なれば町中罷取明当を以出し車を車牛に引せる事あり附祭の当当町々をとり屋臺祭りその地走り踊木を送し町役人は麻上下を着し お庶に美麗を法くせるなり○此祭は八寅に江戸の祭とも云ふ歟

山王の祭や仰ぎ人に人 水壺

山王祭まつりやそのに明年 孤什

相國寺懺法 十七日相風鏡山鏡を用ゆ孫若しとも是いにしへ伝来氏の家附せる事なりと云々

祇園臨時祭 十五日伝屋上の五位東遊を奉ゑる文書り馬鞍乘なりと云々 公 今は雅々なきよしなり

嘉定喰 十六日・嘉定鍋・うつう 年 紀るに曰今日公家武家嘉定の祝儀あり恒謂嘉定通宝十六枚をもて喰物を買ふて是我被せいまに祝福なり故に今に至て其例にならふと云々○嘉祥とも云今十六鍋をもて物買食せるなり古の遺風なり大内にて八寅を祭

六合いを編るよし嘉祥

説義と何也と詳なりとも

笑ふ祝ひや嘉定喰 藥葉子

家ひとつにまつりし笑顔や嘉定喰 風什

何となく何となく宵の月見 素丸 川越 抱翠

傾城を見て帰りけり 素丸 嵐 文里

薬の料に足らぬものなし加茂の瀬 、 不由

かはらり

[湯]女が飼ひそらつかうとはふなしとえへらり
おゝうこいふ六素丸通宗をさ中黒して居る道

この舟逃がすおもなき丁ら虹 葉雉

伊勢の祭禮 十六日夜會宗をゆのる十七日大神宮を參ると云
今日出家参拝のことも禁法なきしむるなり

博多祭 十六日十七日なり祇園博多
櫛田神社のまつりなり

志渡寺祭 十五日より十七日までなり讃岐国
補陀落山志度寺の祭なり



座頭の納涼 十九日当道座頭の祈ひあり遊来をゆくなを納涼積塔
主の母公追善の 今日より当座を執行するなり雨夜の御
遺風なりとて 二月十六日と

宵やさても走る座頭の涼み哉 華零子

冨士詣 一日より廿日まで詣なり富士参する人あまりを
とく八回五月なり

月見て日社外八ッ富士不参詣 古柬

お宿やその間とりおそかかり詣 台 智幽

年詣とりとまかせぬやふじ詣 、 其吏

覚悟ありつくりとまりや不二詣 下サト 外

行人を笠てまつくやふじ詣 、 今貴

若掾ふも皆白妙や士峰詣　泉外
艸卧を口ふ人はたゞふし詣　テハ　靜測
不二詣世界おもひのも本のり本里　ムサシ　如水
おもひ我ら先へくとふし詣、　五波
新風に身を清めてや不二詣、　洒泉
眼のうへに見て二日路やふし詣、　契松
鉢巻も出してはそくやふし詣　ハコタテ　由几
夜ふけより道連ふえて不二詣　渭水

## 御手洗詣

糺のまゝに十九日より晦日迄山城国糺或ハ呂淵とも
書故に下鴨の社を糺の家と云此社東に御手洗川
あり其水至て清冷にして溢れ其のるゝ板を修する
川七瀬の一なり諸人此流に臨て暑さをさける

## 糺の納涼

神垣を出て糺のまゝに水　渭水

## 鞍馬の竹切

廿日紀るに曰鞍峯延鞍馬寺の主となる夜五月護
广を修する日中大地来る峰延毘沙門の咒を誦す地
自ら斬られて段こゝなる其を静原山に棄る俗に其地を
大虫の峰と云今に至て毎年六月廿日村人茶師堂に集りて
根ある大竹を縛り建まゝ別に大青竹二本堂の柱間縛り横
たく法師二十人余白袴を着し山刀をよおしたく座上に出て一本
の竹を近江と称し一本の竹を丹波と称し法師各十人左右に
分列して考をあ弟山刀をぬきおしを知る其遅速によりて
両國の豊凶を占ふ速なる者豊を得たりとすのち其竹をもつ
て堂なるに来りて段こゝにおしを截るおしを竹切と云地を斬る
遺法なり
云々

竹切や常にたゝせぬちのしらふ　菊枝子

雨乞

祭る日やえゝ中の竹林戯に行はし　ハスタテ 徐蓮

竹切りや来れし小山伏　優之

雨乞ひの西雲寄るこの暮沙　古女艸

雨乞や藁の川ハ秋おひ里　玄子

雨乞ひや峰の松風岩[illegible]の声　西風

雨乞やある名の池乃水ちらし　ムセ 南交

雨乞の声しや降る雨、　峨裳

遠よその雲雨乞のまねのくされ　慕生

愛宕千日詣 廿四日・橋立ノ祭 廿五日 丹後・座摩祭 廿二日 大阪

天満天神ノ御祓 廿五日是天満宮也住吉香[illegible] 准て御祓といふ

賀茂みな月の祓 晦日・住吉御祓 同日

唐崎祭 ちかさ[illegible]唐崎に来る事[illegible]賀茂の御手洗ハ昔より御祓の要なり住吉ハ[illegible]の[illegible]南の国[illegible]して御祓なし[illegible]き[illegible]神[illegible]なり[illegible]唐崎ハ[illegible]あり源氏乙女の巻五節の[illegible]君のさ祓の御祓と[illegible]あり[illegible]むかし[illegible]よりの事社[illegible]法[illegible]今も[illegible]晦日[illegible]てくる[illegible]

[illegible]ハ[illegible]のみさ祓かな　住吉

ヨ 節折 ヲリ 図 晦日於て主上の御[illegible]の寸法をとりて[illegible]祓あり[illegible]と云[illegible]竹の命婦[illegible]御[illegible]の寸法をとりて[illegible]の[illegible]御祓[illegible]

大祓 晦日・御祓・川[illegible]・夏[illegible]・夕[illegible]・祓川・[illegible]のこし[illegible]昔八百[illegible]朱雀門[illegible]出て[illegible]

はらくをし侍ることなりなくふる神をたらへたこむるんにまて
なこしのたらへともはらにこたらへともいふなり麻の葉をきり
そぬきとしてこれらへたるゆゑ
麻をたらへくきとはいふなり

御祓

こそき川人新清く流せり　上毛　心星
川浪に秋の来て居る御祓かれ　エチコ　千布
青こと庭こんまてやこそき川、　古棠

夏越の祓

青清し夏越の祓すこし川　佳苔

祓草

白ひまて草く清したらく艸　平寅

形代

御祓するに人形を作りて災難をたらへて川に流せ
事ありしまをいふなり



形代を風の手傳ふ折柴かれ　多代女
のこ代やまこ江に汐のさしぬらち　テハ　雲山
形代の葉り折汐の明りの形、　油静
あるしろや盃さまに舟の屋り　一盃
形代やまのるゝ形の清き場處　ムサシ　水山
あるし代や汐時通し風の来る　ヒタチ　素月
仲より見る形代の流せ布り　下サ　金清
形代や流にふたくと深しつゝ　上毛　葉外

茅の輪

あまて平野天王羅氏物来に夜まけし迷法なり疫病を
やらんとき[illegible]物来の子孫なりといひてちのこをかけ

此災難をのこの君へんとのこまへ歩る故に
今も後にちの君を誠るなり

志るしらぬ神のきく合せたちの君 古 岳輪
童う雑うなりて見このくるちの君 ムツ 智幽
法のそ来る大もくりし茅の輪かれ ムサシ 菓交
子を生んへさしめてくる茅の君 ヒタチ 一笑
古き世のためしを潜るちの輪かれ トサ 其光

## 夏神樂

川社こ君も夏祓に川辺に柳をのまくて神をまつる
子なり 袖

水打て庭も清めて夏神楽 ハコタテ 由儿
松に春縛して夏のくら トサ 花月



## 川社

人春の夜も雑たしや夏のくら ムサシ 平章
夢てこのら見てもとり危夏神楽 一瓢
日の窠てそのこやさけや夏神楽 山祐
寝て笑ハおそきこのり童夏のくら 優之
古の玉相交ともたやし川社 ムツ 由儿
人玉手て廣くなり危川やしろ 文北
さらしさ我柱なるくし川やし語 美湖
この事とてハ弗出と来る川社 ムサシ 波洞
舟のしも神酒の上るや川社 テハ 雪山

あそぶ器にまつる場所の川社　仝　里旭

小蠅なす神　貞徳云蠅のごとく悪神多きをいふなりさはへなす神とは人のわろしきへうらみなすなるもののたぐひ
なそまさるとよの説りさまくありとあり
回にも似りも上層

小蠅なす神や路日あらへする　周芸更　哉白

鎮火祭（ヒシヅメノ）　公　廿日卜部氏の人火をおこす宮城の四方にてまつる事
似り火災をふせぐのんとめなり

火鑽のまつりめでたく論すなり　上井　梅禎

ましつめや都の空ハ風もなき　秀子女

道饗祭（ミチアヘノ）　公　同日四角四境のまつりなり卜部氏の人都の四方の路にて鬼魅の他方より来るを京路に入せさらんとめるよ　四方四境の
路上にて供物を備ふることなり
まつりとなりふなり



施来（セマイ）
東山西山小山寺の山寺の名つきなき法師たちに米塩をあたへやらるによりてせまいとなりたる事なり

道饗の祭りや上ミに京の餅ふ　渭水

小塚まで橋の所まで施米かれ　優々

京中の寺に施米や僧たちの施米かな　鷹巣

雷鳴陣（カミナリノヂン）
雷の音三度ニなく鳴時は大将已下近衛の次将中ゟ宮諸をまもりて紫宸殿の孫庇に候して幸をまち奉るなり　公
西宮記に六月の雷に称せつるて見も六月の題に作りも上層

陣とるや雷の数なる家中　仝　儀友

神鳴の陣をききの出て啼なり　仝　五雲

小暑節　六月の節なり　・温風　月

鷹羽遣を習ふ 月

羽つくのひの自得も暑きかの星うれ　祐之

大暑の節 六月の中なり 溽暑（チヨクシヨ）

明るかれ 樓 枝 蜜る 暑さこの形　巨月

日の出より暑き 源の光りうす　古 京池

夢とせて暑きまさのとや 蔵の流し　芳艸

月の出てくふの 泊つきの 咄の形　丘 茶山

石 泊つき 浪場 笹の 暑さうす　仝

艸も 虫まさ立や 暑さの出て 影り　丶 叢月



炎天

海 泊まんおよりまさ泊つきの形　丶 賢外

近笹の物の中もなき 暑さ心　丶 酒我

巣の塩も 為まさはして 居る 暑さ心　イツ 五夫

暑き日や 皆もこのくなき 人の 影　ヨチセン この立

身をよせる 柱も 暑き 白ひうれ　風什

夜も泊つし 舟の 灯に 風 見えて　二八 久栄

馬士も 然て 通る 泊つさう形　ムツ 文起

志ゆらしき 花も 赤き ハ 眼に 遠し　下サ 庭笠

炎天に 舟さまたけの 銭の形　ムサン 山雪

日盛

炎天や何處へ向かし岫の雲 ムウ 牡山

炎天や雪のこゝろ八重むくら 上手 如水

日さのりや牛の何ゆゑのおれつから 沽 花子

日蓋や人を寄もなきこの里舟 下サ 曽玩

日蓋や蔚さまゝ何る 鳩の豆 ムサシ 海鷗

日さのりや足なのこゝろ藪のこゝろし 旧左

日さのりや鉢鶴鳥のそこて旬 文種

日はのりや松無へ入来る所の何る 素山

日盛れ日の何ゝるなり藪ゝたけ 蕎山

夏八十八

夕立

月 大雨時にわりとらくり

・夜立

夕立に此とり称見る女この郷 古 甚角

夕立の何とや塩の蓴さらけ ヲハリ 李曠

ゆふ立れ来てそり雷を遠出き 曽玩

夕立や隣まで来て雨やとり 卜外

白雨や無分おなるうしの面 卜毛 山古

夕立や縄手遊行ゝたさう馬 北の女

雨雷を待うさし出て磯の山 素湖

雨舟も木蔭に志のく夜立 山左

夜立

天貺節（テンクワウセツ）【書】六月六日宋真宗祥符四年にこの日天書の降りしにより天貺ノ節とせり

三伏 夏至の後第三の庚の日を初伏といひ第四の庚を中伏と云立秋の後庚の日を末伏と云り是を三伏と云なり庚ハ火なり秋ハ金なり夏ハ一陰生しても火を畏るゝ時なれハ金気ふしかくるゝ故に伏といふとぞ【書】秦徳公始て伏祠を作りて蠱（コ）災（サイ）をふせぐ又伏日に出る事なし後漢の和帝伏日に万鬼行とて終日家を出る事なし【事】

土用干

鎧着てつの虫をめさん土用干　古去来

太刀まくら鞘見めくらし土用干し　治蕨子

我宿や抜てこの手の土用干　来芳舎

人まちてこの客の土用干　上毛 心量

しまひ忘れし風なき土用干　江戸 文志

虫干

虫干や書物の虫もかくれける　在尔

…しなりし一寐入　泳喜

虫払

虫払ふや扇の虫も払はるゝ　佳芸

篝 草紙・草紙人・掛馬・たのむしろハ草紙のふみを…遂之

これハ日くらしのこゝろあんとあ候哉山家の詩にも…

これハ日暮の月は上やたのむしろ　亀代女

寐られぬも宵はさむしや篝　梅雅

時計なる家に篝やたのむしろ　五雲

竹婦人

だのむし詠歌も友ゆつまうけ代　渭水
桂の末秋蔭や生の重のこかむしろ　トサ　玉清
月は清く松のこうしろや　簟　金シ　巻永
月のきれ方へ歌くりだの野石　上サ　桜雪
眠るまでさらぬ世の中婦人　ヒタチ　双武
夜の明る風のあたりや竹婦人　ハモ　雪翼
の里で来て一夜寐て世の中ふ人　ムツ　不及
竹婦人さらしき情のうたり竜　ムサシ　晨風
明治にはや押せり此中婦人、　不内



籠枕

鶏鐘にはさ絵もおのまた中婦人　風什
見し夢ハとちへ抜しき籠ゆのくら　秋夕　灌河
ふしあのらなくさんよ籠ゆのくら　上サ　桜禎
月さらし・雪さらし貞治云鶏鳴なくやうの水鳥も
さらしとはへ夜なり納涼とも又さらしとも遊暮とも云へ
さらしさに起て雨見る夜明代　西居
菌の奥も出来のら涼し畑の風　桂蓑
さらしさや堅に木のうけ花の新　魚の女
涼風や仰向て寐る新へ来る　完鶴
さらしさの奥ハ見れ起せ遊笑　蒼陽

すゝしさや菊の細居七ゆり　沾岩子
すゝしさ[illegible]夕雀　ムツ　徐蓮
すゝしさや八寿の頭を笑ひより　ムサシ　葉堂
涼しさや[illegible]ハ[illegible]のおしく　カヒ　東花
すゝしさや松の古葉の[illegible]へ[illegible]る　下毛　梅圃
すゝしくも人ハ[illegible]　上サ　五英

露涼

[illegible]　不由
露すゝし[illegible]　水壺

納涼

一日の[illegible]れ　古　西馬



内庭やすゝむ手筈の[illegible]一荷　露村
翌日の夜[illegible]人数[illegible]納涼[illegible]　[illegible]女
[illegible]の[illegible]れ　京　漁藻
松の雨[illegible]　ナコヤ　一清
夜もすゝのらすゝむ[illegible]　下毛　恩成
門[illegible]の[illegible]　秋夕　[illegible]雪
[illegible]　下サ　芝薫
[illegible]　[illegible]　[illegible]雪

夏瘦

[illegible]の[illegible]　[illegible]　[illegible]

## 青嵐

夜寝よ[illegible]の[illegible]りけり　下サ　翁玩

夜やせをせぬ[illegible]ひ思ひられ　ムサシ　青園

夜やせのひと喜ひや雨の音　三交

折て刈る[illegible]の上を青嵐し　文種

青嵐に揺見えぬ影を吹きけり　其丈

## 風薫

古俳よ　あ里

南薫　六月に吹く涼風なり　南薫[illegible]より[illegible]小風[illegible]を　ひらく[illegible]と　幻住庵の記にあり　又薫風自南来と

風の香も南にちかし最上川　翁

木の葉や晴[illegible]く風のかをる　カヒ　[illegible]



[illegible]の[illegible]蔭[illegible]風のかをりけ里　契史

[illegible]白[illegible]風薫る　鈴成

[illegible]や涼[illegible]風のかをる　酉山

石陰[illegible]の[illegible]風のかをりけり　巣吹

## 雲の峯

夏雲多奇峯と陶淵明か詩に有　貞室云　六月照日の時分　雲の[illegible]峯の[illegible]ある[illegible]云り　増

[illegible]の[illegible]や雲のこと　一漬

根[illegible]涌[illegible]雲の峰　[illegible]芸

[illegible]白雲の峰　上毛　去外

下[illegible]川の白[illegible]のこと[illegible]　[illegible]柏佳

新水

泉

泉水

清水

清水むすぶ
清水せくも変之

眼にもみゆ清水にちかく寄る峠　　契史

雲のさゑ思ひを峰との岩の水　下毛　青什

雨あとくおほふ日笠や雲のさゑ　　巣談

ありてや蝉も離れぬ新水よ　　古其蘭

新水や軒端傾きの人通り　　無瓢遊

古桜並を萬てさくいつとの水　　祐之

人生ふる新汲のまる泉かな　　雪約

泉水や岩根八魚のかくせ處　　手宸

砂原にはく山辺や苔むすら　　瓢将

落ちんて雨水もしる清水かれ　　鳥山

汲むやきる清水の青さし　　山子

堤崩て夜まで青空しるのかれ　　永機

暑ひに桜の風く引まても鮭　　芳艸

清切に落ちこむ鮎清水かな　　一叠

遠き名の岩間をるしるかな　　無竺　南交

流るよつきぬ清水の調り水　　鹿宇

くるやまし所清水を出る家　　鰲賓

[illegible]
[illegible]
樹に[illegible]
[illegible]
[illegible]

浚シ井

六月に井をさらふこと云
又井戸のへとも云
浚し井や鉤瓶おろせ人のよる　トサ　菴水
さらし井や見ぬ人の入交る　ムサシ　市笠

麻地酒

酒 麻地酒は其後西或は祀後の西より出生造方糯米糠米等分に合製して冬室水を用ひこのもし出中に謂ふ



竹茅の類にて覆ひ埋むとあり冬春を經て夏土用に至て出中よりいまはまよく熟せりなりて出のぶりとも云夜月是を賞翫せり

[illegible]
旅[illegible]
井[illegible]
[illegible]

醤油造

醤（ヒシホ）造
心（コヽロ）太（フト）

増 今ところてんと云そのあり庭訓に西山の心太と作るを或説に東山の基に業しなれば大根なりと云り先年その説にしたがひ[illegible]
[illegible]

のおとまさまるよし　笑ゆきこの雪の心ふといとふべきをおもひてんと
云又ところをいと誤里云つくしあるべし先祖悔るのこのひあくおを

賣却雪て替るのなし　人古　古風朗
心左鍾の竹　笑うあり　帝り　霧村
いきて居る世りを明井の人古　上井素絵
蓋よりもう雪る夜の河り　心左丶　宮月
永亀に却えぬ　たのりや　人古　垂　晨風
日こ水も春鶯なこせや　心左丶　風成
山おしてこのき体こ場や　人古丶　龍祐
山水の白しもそふてとおろてん　丶



海こゆる並木の家や　心左丶　水山

不卜の母追善

道明寺　水　松　葛　水　砂糖水

水むきて行こひ給へ道明寺　箱
水の粉に風の姫なる　角の形　古　雪角
葛水にうつて跡し　花の顔丶　菩お
葛水や　箱のかハ風のある　垂　清月
葛水や　旅の出ろ此里と申すこ　テハ　松陽
此里まで出とさらうほし砂糖水　垂　龍友

振舞水　ゆうちは是も振舞水の下向也　古　雪角
まつこの事やふる舞水に人たのり　金精銀子

沖鱠　此味は夏に忌れ候　沖鯰　上サ　春松
沖なまはさ若は藻屑のこの里也　桜雅
高のこの日近く咲て沖なまはさ　下元　山古
岩陰を日除ちたるや沖なまはさ　、誠之
後ちめに若は新里て沖なまはさ　下サ　卜和

洗鯉　百日の御ちら忌しやあらひ鯉　古　雪角

洗鮒　洗ちせる鮒やあらは好こなかて　春村



水飯　裸火て見るまや鮒の御ちひだて　ムサシ　沖友
水飯にこのまうぬ所のしつくの所　古　雪角

洗飯　此外もぬまのるせうなりの御ひ飯　春白
洗飯ちてめて針をおのせけ里　拱立

糒（ホシイ）　よき照りに御のる糒の白ひうれ　ムサシ　東空

海月取（クラケトル）　海月とるまはさ也星の影　あ方　重雪

干瓢剥　瓢むく日我見ちてめて降ち雪也　古　千壽

早桃　漆生来て此上ちし早桃うれ　文里
花の月をこそしぬたのり此早桃汁　優々

林檎（リンゴ）

いひの都せ仏るとる林檎の形　雪駒
風よりも鳥のおとせ里んしかな　優々

百日紅

蓮の葉に奉ゑ出し鬼百日紅（トサ）　玉清
咲りつゞける農自ふや百日紅ゝ　雪岳
花艶のいつまで新を不日紅　思成
年に問へハ称宜の家あり不日紅　八九雅
一枝も咲おとりあし不日紅　露光

瞿麥（ナデシコ）

やまとまてしこ・このらなりてしこ・川原撫子・蟾あてしこ
夏あてしこ・常夏美名
撫子や健康に永き花　蓼（ムサシ）　蒙三



蓮ノ蕊（ハス ハヒ）

撫子や花にとゝのぬ風にとゝる　上毛　白蕊
蓮の蕊根のみあり
鶏のけのうちに花とまや蓮のたゝむ　龍稱
存かにふとりのつきぬ蓮のたゝむ　氷壺
寺の名も語くしく志ゝまた蓮の蕊　巣吹

蓮

花の葉・蓮の実貞徳云蓮ハ花と実を具してなる故に
蓮の実も夏あり其ものの実飛ふハ秋あり
咲ま急鶏ての後や雛の蓮（ニハ）　素屋
たまに見るや蓮しかしも鶏の内（キイ）　寄舟
蓮却るや光悟しと花とまもの重ね（テハ）　灌河

[illegible]

澤瀉（オモタカ）

澤瀉や東のこゝろ[illegible]　下サ　貞忠

おもたかの粒[illegible]　[illegible]

澤瀉に人も出て居る晴[illegible]　牡山



骨蓬（カウホ子）

おもたかや田の[illegible]　ムサシ　文志

澤瀉や深さも[illegible]　下毛　梅左

河骨の花[illegible]　如白

川[illegible]　[illegible]

河骨や馬[illegible]　[illegible]

菱の花

[illegible]　トサ　甚岳

[illegible]　テハ　油靜

蒲の穂

蒲の穂や小田[illegible]　優々

海松（ミル）

うきこゝる・こゝるふき

[illegible]夕や新しき殘のとる　優々

蘭を苅　[illegible]蘭をかる[illegible]　龍水

青芒　青[illegible]　古　乙二

風蘭　福　[illegible]

風を[illegible]　風葉や老の[illegible]　龍得

眼皮　[illegible]　古　道[illegible]

凌宵花（ノウセン）　凌宵や[illegible]　乙良

凌宵や[illegible]　桃悦



日向葵　日[illegible]　日[illegible]

玉簪草（ギボウシ）　玉簪[illegible]　優々

麒麟草（キリン）　[illegible]

[illegible]

釣鐘の花　[illegible]　[illegible]

葎ノ花　[illegible]　古　道[illegible]

月にてくるまで日にのり蓮も花も時　嗤風

射干（シヤカン）　かうさをあふぎ・うちはおぎ　ひあふぎ

射干ハのくさ雄子のこのさし　兼　右　帝固

紫蘇　淵のしぬ白ひや志そのさ水を苗　仝　風友

色も香もあまけに紫蘇の二紫代、　ぬ水

綿ノ花　綿の花はなきて雨のよそを降　内　芸

虫おくり淘し在伝や綿の花　氷壺

青鬼灯（アヲホウヅキ）　丹漆を青ゆつきの虫の世話　一求

青蕃椒　青ゆつきのうち紅白ひや唐のうし　ムウ　内　几



漆搔（ウルシカク）　増　こえ年　九月の新にあり　題　六月の季にあり

箋　うるしの木に技搔まして悪く雑を以挽回をつきそのの挽

回ありやうに我蔵を見る生漆けあり奥羽及び下野和州を後し

西国にもあるあり其脂をのきとる法国皆六七月あり九月に出せる

ハ遠ひなりんと云ふ○予竹猪こ食會津の山中にてうるしのく変

をもんとり其老にとひしに霧二霧の時分に至るハ暑中の三ヶ一も

とせぬと云り是実説也さ何其ハ六月の

季に出せる最よりしと見也

搔ハ粉をく照さしらるしの形　士敬

不幸寒に草ふたりやうるし　搔　彼陽

宿引もこのはたれ水を漆と星　分貴

漆のく人やさせしきこうし　活新　氷壺

山新を笠にはまれてうるし　搔　樹石

麻・麻苅・櫻麻・苧（カラムシ）

【増】夏苧・青苧・信濃苧【和三】苧麻大麻ともに皮を剥てゝかゝせて通して苧と称す也ゆゑに麻苧を以真苧とも云ふ物なり宮上の産を佳とす大なるはさらに綾るゝその出来あり越後ちゝこを織るゝその出来越の産あり又其外打木より出る糸も多し皆江戸へ来る【和】苧和名加良無之とあり○さくらに麻を花のさくらに相なる也の名あり

苅時をさしてさしに麻に月を帯ゆる　棧葛

雲の鋼もまゐらせ麻の苅綿し　優々

霧の中麻にかゝる青の空えん帝里　巴雲

白山の雪やあらせてさくらに麻　古路通

櫻麻

苧（カラムシ）

俗越後とも云ふ越の産あり其国にて多分捌方に成江戸へ積込ゆゑ也と云ふ程く良麻を白く曳力あり



かゝむしの出来やゝ雪の多き国　仙月

青苧

青引麻と唱く信州の産あり丈長なり諸麻にまさく称り又曳力も有り

出来あり就ちはいとえぬ青苧ぐ　仙月

夏引ノ糸

【枝】夏引の糸とは麻あり其つを同前夏引の白糸は夏蛩の糸のみあり

葛の花

七くさの出歌まゐりて秋の新りいとせ

香需散

異物を拂ふ葉あり悪霧とせたの雪も

不二見ゆる霧は休とて悪霧　菱　優々

蒜ノ根

家うちこれまんぬく喰ふと白ひぐ　露光

鶴の根や鶴て黒ても干ひしまし　平宮

瓜

胡瓜・このう瓜・水瓜・ひめ瓜

ちとゝ茶きて瓜やきるれば高合 ムサシ 三学

瓜をとりて翌日の朝荷を見て出る、叢月

瓜揚て何とのあまのく手桶の水 下サ 庭花

胡瓜

まとゝ花の花まで起こまで何る胡瓜哉 イツ 青露

真菜瓜

一ツでもこゝや市にはなる瓜 黒菜う里 下サ 方泉

細てきゝふ分ハとのめ瓜 黒菜瓜 氷壺

冷し瓜

云やし瓜見る姫しさのこゝちかれ 田鰲

冷し瓜 蝉居を人に儒りけ里 イツ 其数



夕顔

ひさまの花

採ま所へ家をまとめてひやし瓜 ムサシ 関水

夕の雨や見まとの遠き演屋愛 京 漁藻

ゆふ顔や四条にちのき魂まもひ 下毛 後夏

夕のかの下や裸も傘のやまき、 子蕃

夕良や蒼る志をしを寒なし花 ムツ 清民

旋花

ひる良や屋市をまとれし崖の土 為山

旋花や市しきハつるのうまく 時 森人雄

云る顔や月ハさせしも日の日ひ ムツ 六槐

竹の皮取

ひる敷やいはゝる社上に 咲かゝる 下サ 曹 琥

ちりそめし目に牽もつゝ井の波 丶 金 順

蝸の糸引て落ちり 井 社 波 丶 弧 成

都のふ所に牽ふの落ちり 竹の波 ヒタチ 素 月

青瓢

むとゝ鼠に牽しきとゝ生て青瓢 古 一 藻

葉のくせも数によりまれて青ふくへ 一 求

新タクリ志せるそこもちや青ふく亀 龍 得

川狩

川のりや如ゝ覚悟の両奥流し 古 黄 山

川狩のゝ事社ありや 掬の斎 露 光



川狩の所りや此所もこの渇り 下毛 思 成

川この里やよりはこのもとゝ悪古郎 唯 風

趍鶴（子り ヒバリ）

年 練雲雀凡六月毛をこのゆるを俗に練出すりといふ毛をあゆるとき飛ぶすれやこのしきゆゑり廣きを放して是銭

とる又或説に練雲雀とハ青入雲雀の異語なりと云々

雲雀の建ま人も居ま練出すり ヒタチ 素 月

山間や都のふの変に祝りしき里 上サ 由 儀

建ま州に先社見きれき練雲雀 オシ 花 楽

雲雀鷹

ひたり鷹いきれる州を見ま居ちり 龍 得

蝉

うつせゝ 蝉のこゑの事

蟬なくや一所さつと云るの風 上毛 一為
里ハこゝ所 漱ハ志をりて蟬しく也 ヱヲコ 古 春宝
志里しくと見ハ山の端ハ蟬 時面 ムツ 文記
高ハ樹にしたゝて居るや蟬時面 下毛 巣欣
蟬なくやのそくる極の人通り 、 蜻松
空蟬 空せるや蟬ハその末ハ暑き夢 清民
空蟬やおもひ水にひ為る枝 由像
蓬の世を身のうきに蟬のそぬけ心 東以

夏虫

身をまつのまとしよの虫ハ蛾なり火名虫といふも同しかゝ
又黄蟬なとをもよめり



火蛾 ヒトリムシ

法相繼て飛出行なり夜の虫 古 闌更
蓬にも春ハ稀なり夏の虫 ヱヲコ 葵史
夜むしや盃さまれ水のうへ 下サ 菅水
鳴もせて春ハ何してなつの虫 上サ 赤肖
火名虫ふるき霊へ逃し帯り キイ 露舟
蹄うつやうに来る里空とり虫 下毛 山古
夜に入春ハ蜻とも居れ火蛾 上サ 立英
来る時ハ続てくるや空名むし ムサシ 圓山
おの社のら置るなし竜火名虫

兜虫　嬉ふ人の方へはひけり　兜むし　ムサシ　緑友
おもむきや名さへなきの兜虫　エト　不老

秋隣　来ぬ秋・秋なり
川ばちや秋を隣にはふ風　一求

秋近　夕くれや秋ちかくなるを秋ち　由保
鉾の川は何をしらせ芒の秋近し　エチコ　梅迷
雲の清水風うはこえて蜂手し　菜映

夏の雨　夜の雨より明るまはせて夜の淡き　白カハ　橋泉

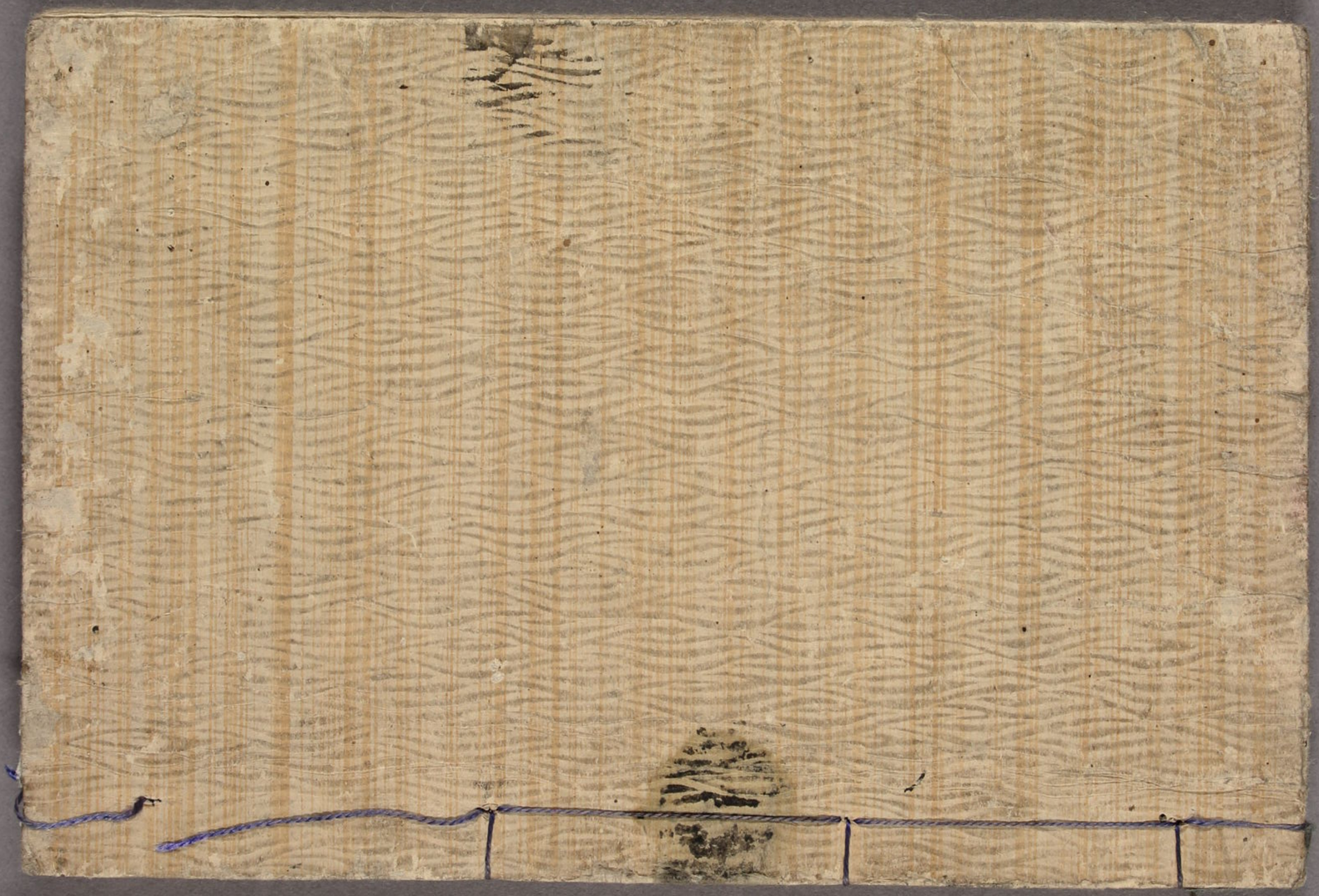
夏坐敷　秋猶寄の住家に寄せ



山は海もうまきへるや夜坐しき　菊
海をのし風の何なるや夜坐愛　テハ　雪山

夏ノ月　明石夜泊
蛸壺やたのなきを夢をなつの月　菊
星舟の何とまくるを夜の月　為山
旅人は才を橋やなつ秋月　山子
うとのけし人の訪ひ来ぬ夜の月　仲右
川の夏秋星よりて夏の月　ムカシ　叢月
とくやうに人のふえけり夜のくゝ　葉堂

# 把桂書

夏終

椒の葉れ何たきに更にこの月 ムサシ 龍成
[illegible]の月 ヨチコ 素丸
[illegible]の葉に[illegible]の一き 、 雪朗
人夢の[illegible]の月 トサ 柳翠
[illegible]の月 波静
破鐘の[illegible]の月 古 和枝
市中ハ[illegible]の月 、 氏兆
[illegible]退く[illegible]伏見や夏の月 、 嵐雪